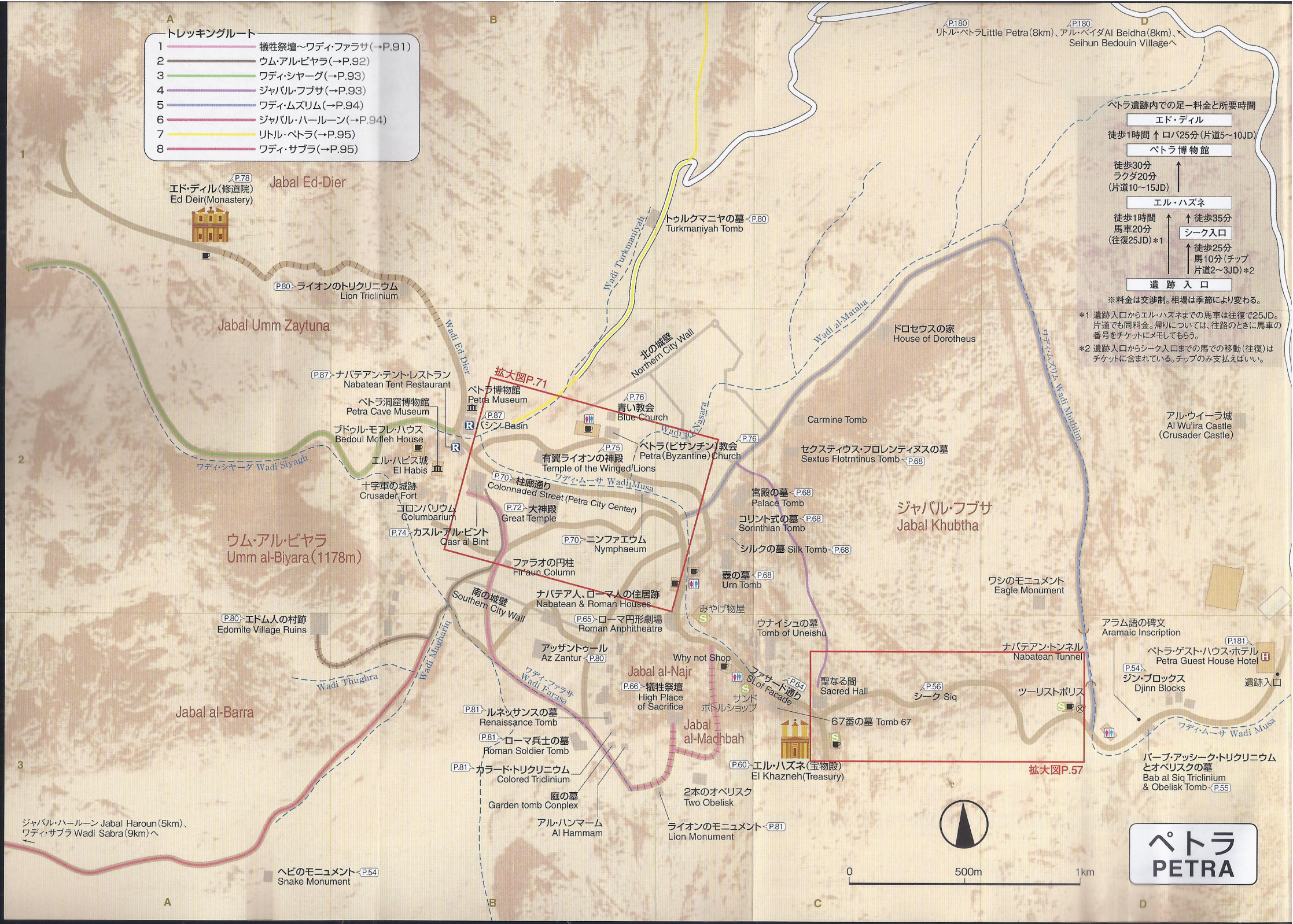
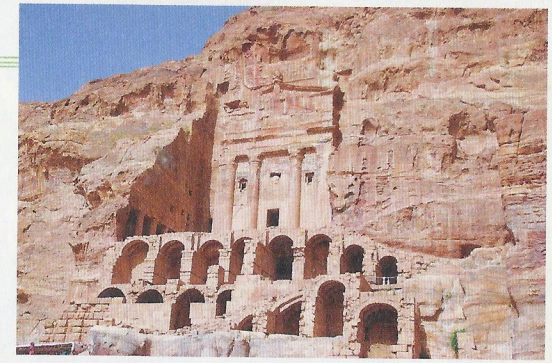

トレッキングルート
1 犠牲祭壇～ワディ・ファラサ(→P.91)
2 ウム・アル・ビヤラ(→P.92)
3 ワディ・シヤーグ(→P.93)
4 ジャバル・フブサ(→P.93)
5 ワディ・ムズリム(→P.94)
6 ジャバル・ハールーン(→P.94)
7 リトル・ペトラ(→P.95)
8 ワディ・サブラ(→P.95)
P.180 リトル・ペトラLittle Petra(8km)、アル・ベイダAl Beidha(8km)、Seihun Bedouin Villageへ
ペトラ遺跡内での足一料金と所要時間
エド・ディル
徒歩1時間 ↑ ロバ25分(片道5～10JD)
ペトラ博物館
徒歩30分
ラクダ20分
(片道10～15JD)
エル・ハズネ
徒歩1時間
馬車20分
(往復25JD)＊1
↑ 徒歩35分
シーク入口
↑ 徒歩25分
馬10分(チップ
片道2～3JD)＊2
遺跡入口
※料金は交渉制。相場は季節により変わる。
＊1 遺跡入口からエル・ハズネまでの馬車は往復で25JD。片道でも同料金。帰りについては、往路のときに馬車の番号をチケットにメモしてもらう。
＊2 遺跡入口からシーク入口までの馬での移動(往復)はチケットに含まれている。チップのみ支払えばいい。
P.78 エド・ディル(修道院)
Ed Deir(Monastery)
Jabal Ed-Dier
P.80 ライオンのトリクリニウム
Lion Triclinium
Jabal Umm Zaytuna
Wadi Ed Dier
Wadi Turkmaniyah
トゥルクマニヤの墓 P.80
Turkmaniyah Tomb
北の城壁
Northern City Wall
Wadi al-Matahah
ドロセウスの家
House of Dorotheus
ワディ・ムズリム Wadi Muhlim
アル・ウィーラ城
Al Wu'ira Castle
(Crusader Castle)
拡大図P.71
P.87 ナバテアン・テント・レストラン
Nabatean Tent Restaurant
ペトラ博物館
Petra Museum
ペトラ洞窟博物館
Petra Cave Museum
P.87 バシン・Basin
ブドゥル・モフレ・ハウス
Bedoul Mofleh House
エル・ハビス城
El Habis
十字軍の城跡
Crusader Fort
ワディ・シヤーグ Wadi Siyagh
P.76 青い教会
Blue Church
Wadi al-Nasara
ペトラ(ビザンチン)教会
Petra(Byzantine)Church
P.76
Carmine Tomb
セクスティウス・フロレンティヌスの墓
Sextus Flotrntinus Tomb P.68
P.75 有翼ライオンの神殿
Temple of the Winged Lions
ワディ・ムーサ Wadi Musa
P.70 柱廊通り
Colonnaded Street (Petra City Center)
P.72 大神殿
Great Temple
コロンバリウム
Columbarium
P.74 カスル・アル・ビント
Qasr al Bint
P.70 ニンファエウム
Nymphaeum
ファラオの円柱
Fir'aun Column
ウム・アル・ビヤラ
Umm al-Biyara(1178m)
宮殿の墓 P.68
Palace Tomb
コリント式の墓 P.68
Sorinthian Tomb
シルクの墓 Silk Tomb P.68
壺の墓 P.68
Urn Tomb
ジャバル・フブサ
Jabal Khubtha
ワシのモニュメント
Eagle Monument
ナバテア人、ローマ人の住居跡
Nabatean & Roman Houses
南の城壁
Southern City Wall
みやげ物屋
P.65 ローマ円形劇場
Roman Anphitheatre
ウナイシュの墓
Tomb of Uneishu
P.80 エドム人の村跡
Edomite Village Ruins
アラム語の碑文
Aramaic Inscription
ナバテアン・トンネル
Nabatean Tunnel
P.181 ペトラ・ゲスト・ハウス・ホテル
Petra Guest House Hotel
P.54 ジン・ブロックス
Djinn Blocks
遺跡入口
アッザントゥール
Az Zantur P.80
Wadi Maghariq
Wadi Thughra
ワディ・ファラサ
Wadi Farasa
Why not Shop
Jabal al-Najr
P.66 犠牲祭壇
High Place
of Sacrifice
ファサード通り
St.of Facade
P.64
サンド
ボトルショップ
聖なる間
Sacred Hall
P.56 シーク Siq
ツーリストポリス
Jabal al-Barra
P.81 ルネッサンスの墓
Renaissance Tomb
P.81 ローマ兵士の墓
Roman Soldier Tomb
Jabal
al-Madhbah
67番の墓 Tomb 67
ワディ・ムーサ Wadi Musa
P.81 カラード・トリクリニウム
Colored Triclinium
P.60 エル・ハズネ(宝物殿)
El Khazneh(Treasury)
拡大図P.57
バーブ・アッシーク・トリクリニウム
とオベリスクの墓
Bab al Siq Triclinium
& Obelisk Tomb P.55
庭の墓
Garden tomb Conplex
2本のオベリスク
Two Obelisk
アル・ハンマーム
Al Hammam
ライオンのモニュメント P.81
Lion Monument
ジャバル・ハールーン Jabal Haroun(5km)、
ワディ・サブラ Wadi Sabra(9km)へ
ヘビのモニュメント P.54
Snake Monument
0 500m 1km
ペトラ
PETRA

ペトラ遺跡
入門
Introduction to Petra

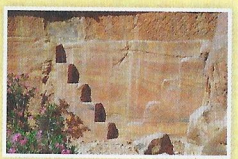

王家の墓のひとつ、壺の墓

ペトラ遺跡とは…

紀元前1世紀～紀元後1世紀にかけて建設された、古代アラブ民族のひとつ、**ナバタイ人**の首都の遺跡。ナバタイ人以前、以後の史跡も複合的に残されており、この地域の歴史を知るうえで大変貴重な遺跡として知られている。遺跡公園内には、エル・ハズネ、エド・ディルなど有名な巨大岩窟墓を筆頭に、多くのナバタイ、ローマ遺跡が見られ、世界中からの観光客が絶えない。1985年に世界遺産に登録、2007年には新・世界七不思議のひとつに挙げられている。

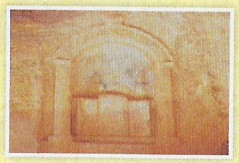
キーワードで見るナバタイ人

ペトラを造り上げたナバタイ人とはどのような民族だったのだろうか？
キーワードをもとに知られざるナバタイ人の姿に迫ってみよう。



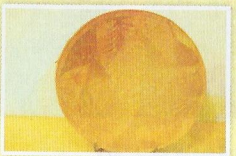
アラブ

ナバタイ人は、アラビア文字の起源となるナバタイ文字を使用していた、古代アラブ民族のひとつ。その起源については、現代でも統一見解はないが、一説によるとメソポタミア周辺ではないかといわれている。



キリスト教

ナバタイ人は、さまざまな起源の神々を崇拝する多神教であったが、3～4世紀にキリスト教化。以降、ペトラには教会が建てられ、5世紀半ばには主教座が置かれるなど、キリスト教の重要な拠点のひとつとなった。



ナバタイ土器

エドム人から引き継いだ技術をさらに発展させ、ナバタイ土器という美しく機能的な土器を生みだした。土器は卵の殻のように薄く、植物文を中心とする美しい文様が描かれた。子供向けにつくられた動物型の土器も出土している

水利システム

ナバタイとはもともと「水を掘る人」を表すセム語。彼らは水を治める技術に長けていたことで知られ、ペトラ遺跡にはナバタイ時代の水道管、ダムなどが見られる。エル・ハズネまで続くシークの左右にはふたつの水路が通っていた。

香料貿易

ナバタイ人は乳香、没薬などの香料貿易で繁栄。その交易網は、アラビア半島や北アフリカ、遠くはインドまで広がっていた。彼らは国土というよりも、交易拠点という概念で勢力を拡大し、主要な町としては、マダイン・サーレハ(サウジアラビア)、ボスラ(シリア)、ダマスカス(シリア)などが挙げられる。

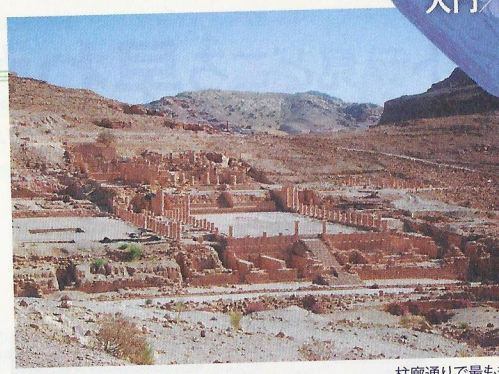
ナバタイ文字

アラム文字を発展させたナバタイ文字を使用。しかし、ナバタイ人の歴史を語る碑文資料は限られており、いまだ多くのことが謎に包まれている。ナバタイに関する記述は、その多くが周辺国であったユダヤやローマの文献によるもの。

ローマ帝国

ナバタイ王国は香料貿易で繁栄を極めるも、2世紀にローマ帝国に征服される。その後もローマ帝国のアラビア属州として繁栄は続いたが、4世紀の大地震で、ペトラは壊滅的な打撃を受けた。

ペトラの
歴史
History of Petra


柱廊通りで最も規模の大きい建物、大神殿

新石器時代から ナバタイ人の到来まで

ペトラのわずか北に位置するアル・ベイダAl Beidhaには、1万年前の新石器時代から人類が集落を造って生活していた痕跡がある。これは、ヨルダン川西岸にあるエリコと同様、中東で最も古い歴史をもつことを意味する。この地域に初めて本格的に登場した民族はエドム人Edomitesである。彼らはユダヤと関係が悪く、紀元前1000年頃ユダヤの王ダビデに小国エドムが襲われるなどの戦いがあり、紀元前8世紀にはユダヤの王アマジアAmaziahが1万人のエドム人を崖から落として殺したといわれる。

紀元前6世紀になると、ナバタイ人がペトラに定住し始めた。彼らは元来遊牧民族で、この地域を通るキャラバン隊に安全を保証することで財政を潤わせていた。紀元前4世紀末にはマケドニア帝国から分裂したセレウコス朝の襲撃を受け、大きな被害を受けた。アラビア語を話し、アラム語を書き、宗教はセム系で、美術建築はヘレニズム、天然の砂岩に彫刻して中心街路を造るなど、ナバタイ文化は基本的にはアラビア文化の流れをくんでいたが、ギリシア文化の影響も少なからず受けていた。「ペトラ」とはギリシア語で「岩」の意味。ちなみにナバタイ語ではレケムと呼ばれていた。

ローマの支配とその後

ローマ帝国のポンペイウスは紀元前63年にはシリアとパレスチナを征服した。そしてついにはペトラにまで兵を派遣したが、財政豊かなナバタイ人は金を払ってローマ軍を懐柔し和平を結んだ。その後、ユダヤの王ヘロデに攻撃を受け、2度目の攻撃の紀元前31年には広範囲の領土を失った。そしてナバタイの王室の伝統も106年にペトラがローマ帝国に併合されたことによって終わりを告げ、浴場や劇場、列柱通りの建設など、ローマ風に町が造り替えられた。

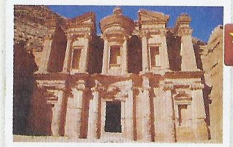
2世紀半のローマ支配の後、363年に大地震がペトラを襲い、多くの建物が崩壊するなど、ペトラは壊滅的な打撃を受けた。それ以来栄光を取り戻すことはなく、6世紀末～7世紀にかけて次第に人が住まなくなった。

その後、7世紀にイスラム軍が到来し、12世紀には十字軍が砦を造った以外、ペトラは人々に忘れられた廃墟になった。そして1812年、ダマスカスからカイロまで行く途中にペトラの噂を聞きつけたスイス人探検家ヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルトが、外部の人間に生活を乱されることをおそれる現地人の目をかいくぐって遺跡を確認し、世界にその存在を伝えたのだ。

ビザンチン時代の教会

ペトラ見どころ早わかりマップ

Quick guide map to a highlight of Petra

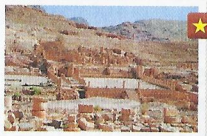


★エド・ディル Ed Deir（修道院 Monastery）
ペトラで最も大きな神殿
AD1 →P.78

ライオンのトリクリニウム Lion Triclinium
2匹のライオンに守られた墓 AD1 →P.80

★有翼ライオンの神殿 Temple of the Winged Lions
女神ウッザーを祀った神殿
BC1 →P.75

★カスル・アル・ビント Qasr al Bint
ペトラで最も重要な神殿のひとつ
BC1 →P.74



★大神殿 Great Temple
主神ドゥシャラーを祀った神殿
BC1 →P.72

★柱廊通り Colonnaded Street
列柱の並ぶかつての市街地
BC1～ →P.70

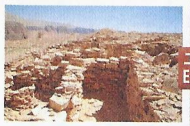
十字軍の城跡 Crusader Fort

コロンバリウム Columbarium

青い教会 Blue Church

ナバタイ人、ローマ人の住居跡 Nabatean & Roman Houses

ファラオの円柱 Fir'aun Column



エドム人の村跡 Edomite Village Ruins
エドム人の避難所セラ
BC7 →P.80

アッザントゥール Az Zantur
1世紀の住居跡
AD1 →P.80

ルネッサンスの墓 Renaissance Tomb →P.81
埋葬穴が見られる墓 AD1

カラード・トリクリニウム Colored Triclinium
内部に装飾の見られる墓
AD1 →P.81

庭の墓 Garden Tomb Complex

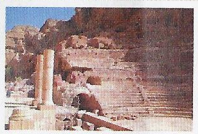
ライオンのモニュメント Lion Monument
治水システムの跡
BC2-AD2 →P.81

ローマ兵士の墓 Roman Soldier Tomb
ローマ兵士の彫刻が施された墓
AD1 →P.81

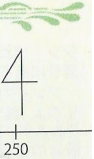
ヘビのモニュメント Snake Monument

★犠牲祭壇 High Place of Sacrifice
生贄の儀式を行った高台 BC1 →P.66

★ローマ円形劇場 Roman Anphitheatrer
宗教儀式場としても使用された
BC1 →P.65



星印：はずせない見どころ
★ペトラ（ビザンチン）教会 Petra(Byzantine) Church …… 見どころ名称
ビザンチン時代の教会 …… 遺跡の説明
AD6 →P.76 …… 掲載ページ
建造年代

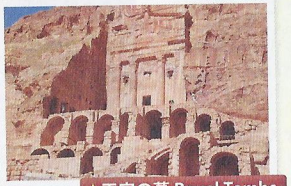


トゥルクマニヤの墓 Turkmaniyah Tomb
ナバタイ文字の碑文が残る AD1 →P.80

キリスト教徒の墓 Christian Tomb

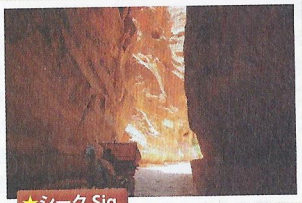
★ペトラ（ビザンチン）教会 Petra(Byzantine) Church
ビザンチン時代の教会
AD6 →P.76

ドロセウスの家 House of Dorotheus

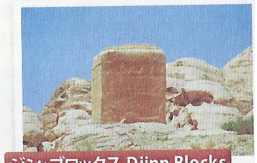


★王家の墓 Royal Tombs
歴代の王が建造した墓
BC1～ →P.68

アル・ウイーラ城 Al Wu'ira Castle (Crusader Castle)



★シーク Siq
エル・ハズネへと続く1.2kmの渓谷
→P.56



ジン・ブロックス Djinn Blocks
聖霊が宿ると伝えられる墓
AD1 →P.54

ワシのモニュメント Eagle Monument

聖なる広間 Sacred Hall

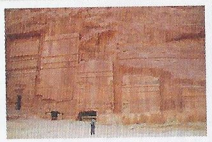
ナバテアン・トンネル Nabatean Tunnel

遺跡入

アラム語の碑文 Aramaic Inscription

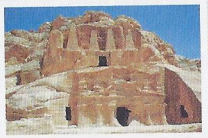
67番の墓 Tomb 67

ファサード通り Street of Facade
40以上もの墓が連なる
BC1 →P.64



★エル・ハズネ El Khazneh（宝物殿 Treasury）
アレタス4世が建設
BC1 →P.60

★バーブ・アッシーク・トリクリニウムとオベリスクの墓 Bab al Siq Triclinium & Obelisk Tomb
エジプトの影響が見られる
BC1 →P.55



聖霊が宿ると伝えられる墓 AD1

ジン・ブロックス

Djinn Blocks

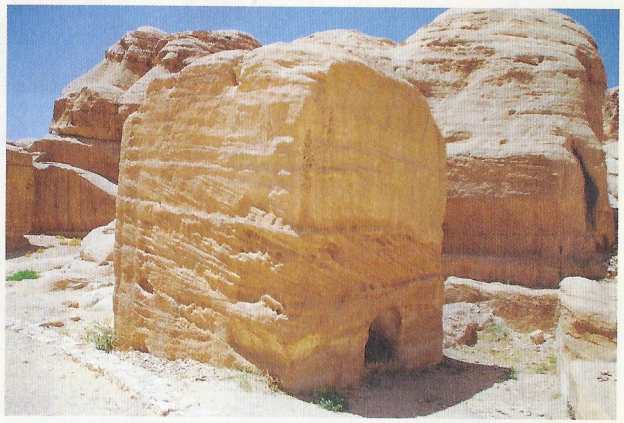
MAP 折込裏D3

ジン・ブロックスの周りにある墓

ジン・ブロックスの周りでは、墓や洞窟が散見されるが、これは社会的階級の低い人々の墓であると考えられている。年代は古く、紀元前2世紀の終わりから紀元前1世紀にかけてのもの。

ナバタイ人の信仰

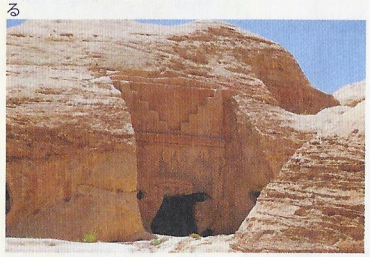
ナバタイ人は超自然的な存在として3つのものをあがめていた。まず実際に存在した祖先の霊。それから、人間とはかけ離れた存在である神。そして、そのどちらとも異なる聖霊だ。アッシリアやバビロニアにおいても、同様の存在が信仰されていた。

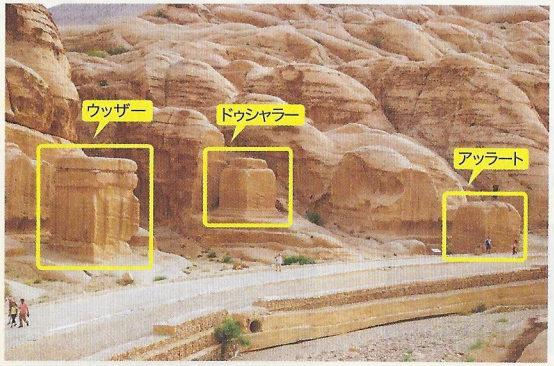


香料がたかれていたという小さな祠が見える

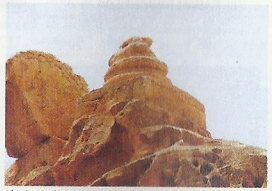
ゲートを抜けてまず右側に見えてくる遺跡がジン・ブロックスだ。メインロード脇に3つのモニュメントが建っている。ジンDjinnとは聖霊を表すアラビア語。現地の言い伝えによると、人間の霊とはまったく異なる、神の下に位置する存在としての聖霊がここに宿り、それを祀る場所であったということだ。聖霊は水のそばに宿るとされているため、これらジン・ブロックスは水の流れのそばに建てられているという。もっとも、研究者の間では、墓であるとの見解が一般的で、ペトラ遺跡内にある数種類の墓のうちのひとつ、方形墓であるとみられている。一番左は天然の岩に縦じま模様の彫刻が施された、高さ9mのブロック。右のふたつはアラビア語でサフリージュ Sahrij（貯水槽）と呼ばれるブロックだ。遺跡公園内には、同じようなモニュメントが26ほど見られる。ワディ・サブラ(→P.95)へ続く道にあるヘビのモニュメントもそのひとつだ。一説によると、一番左がナバタイの女神ウッザー、真ん中の一番高いブロックが主神ドゥシャラー、右がふたりの娘アッラートを表すともいわれている。

ジン・ブロックスの近くにある墓。ナバタイ人特有の階段型の装飾が施されている





オベリスクの墓から見たジン・ブロックス



岩山の上にあるヘビのモニュメント

オベリスクが彫られた墓 BC1

バーブ・アッシーク・トリクリニウムとオベリスクの墓

Bab al Siq Triclinium & Obelisk Tomb

MAP 折込裏D3

バーブ・アッシーク・トリクリニウム

バーブ・アッシークとは、ゲートからシークまでのエリアのことで、そこに位置するトリクリニウムという意味だ。うす暗い闇に岩の段があるだけの現在からは想像できないが、ここでは、死者のための饗宴の儀式が行われた。おもに古いナバタイ様式だが、柱はドリス様式でギリシアの影響が明白だ。上下の建物は別の建物で、先にバーブ・アッシーク・トリクリニウムが建設され、あとにオベリスクの墓が建てられた。

用語解説

トリクリニウム Triclinium

低いテーブルを中心に、三方に長イスが配置された、古代ローマ時代のダイニングルーム。ローマ人はここに客人を招いて儀式的食事を行った。トリTriは3を意味し、クリニウムは長イスを意味する。

オベリスクの墓

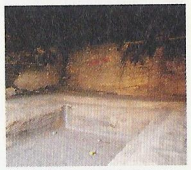
そびえ立つ4つの尖塔がエジプトのオベリスクに似ていることからそう呼ばれている。中には5つの埋葬穴、外側には貯水槽がある。誰の墓なのかについてははっきりとわかっていないが、ナバタイの王アレタス1世の墓ではないかという説がある。また、オベリスクの真ん中に掘られた人物についても、エジプトの女神イシス、墓に埋葬されている人物など諸説がありはっきりしない。あるナバタイ人の墓に書かれた碑文には、岩壁に掘られたオベリスクは、埋葬されている人物の“ネペシュ”を表すとの記述がある。“ネペシュ”とはナバタイ語で「魂、聖霊、自身」などといった意味である。同時にオベリスクはナバタイの神々を表すシンボルとして、ナバタイ人の葬祭の儀式に必要なものでもある。ペトラにはあらゆるタイプの墓が見られるが、このような霊的意味を含んだファサードをもつものはこれひとつしかなく、シークへ続く道を守る建造物として重要な役割を担っている。

オベリスクの墓の内部

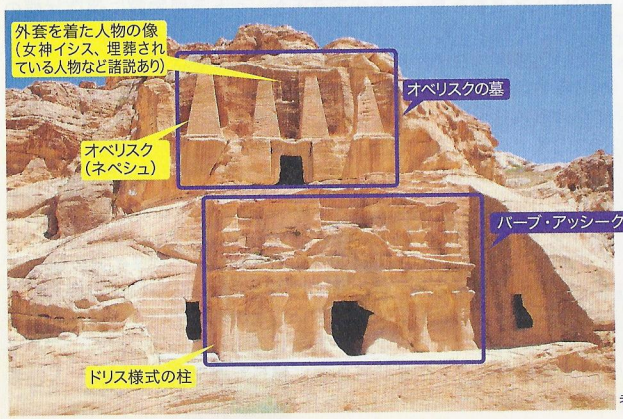
バイリンガルの碑文

オベリスクの墓の向かいには、オベリスクの墓について書かれたアラム語とギシリア語の碑文が残っている。以下、訳文。「ウタイフの息子スライの息子アカイウスの息子アブドマンクは、彼の存命中(マリクス王の治世)に、この墓を(彼自身)と代々続く彼の子孫たちのために建てた。」

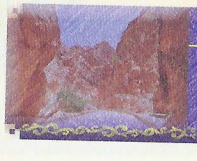
道を挟んで反対側に位置するバイリンガルの碑文



儀式が行われたトリクリニウム内部



考古学的に重要な意味をもつ



エル・ハズネへと続く峡谷

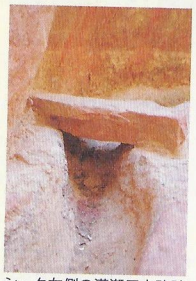
シーク

Siq

MAP 折込裏C3

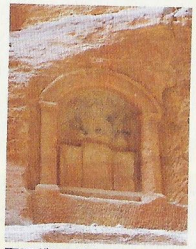
ペトラの砂岩

ペトラの砂岩はさまざまな鉱物でできているため、ときに非常に美しい岩肌を見せてくれる。赤は鉄、黄は硫黄、茶は銅、青はコバルト。これをボトルの中で砂絵にしておみやげとして売っている。



シーク左側の灌漑用水路跡

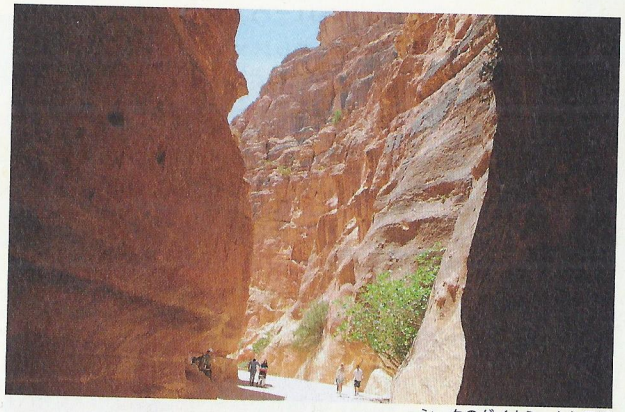
シーク右側の飲用水路跡



聖石が3つ並んでいる

ナバタイの神

ナバタイ人があがめていた神はおもに、主神ドゥシャラー、女神ウッザー、ふたりの娘アッラートの3神。何も描かれない石板から始まり、時代を経るに従って目や鼻をもつようになっていく。



シークのダイナミックな景観

長さ1.2kmの峡谷

シークとは狭い岩山の裂け目のことで、頭上に迫り出した崖の高さは60～100m。ペトラの中心地へと続く峡谷として、シークにはナバタイ人が水源地から水を引いていた水路やダムの跡が見られる。また、道中にはナバタイ人が信仰していた神を抽象的に表現した聖石なども見られる。古代にはヘロデ大王、アレタス4世によって石畳が敷かれていたが、洪水などにより現在はわずかしか残っていない。現在見られるもののほとんどはヨルダン政府が整備したものだ。

水路とダム

シークでは、ナバタイ人の治水に関する遺跡が見られる。まずは水路跡。シーク入口からエル・ハズネまで、道の両脇に水路跡が残されている。エル・ハズネに向かって右側は飲用水を引いていた水道管。素焼きの水道管が延々と続いている。ところどころで岩に張り付いた水道管を見ることができるが、ペトラ博物館に保存状態のよいものが展示されている。圧力がかからないプッシュ&リリース方式という高度な技術が用いられたものだ。左側は灌漑用水路。古代ペトラでは、冬、アイン・ムーサから流れ込む水が洪水となってシークに流れ込んだ。これを防ぐためのダムが、シーク入口手前やシーク内部で見られる。ただし、現在でも冬季に洪水は起こっており、1963年には23人のフランス人観光客が洪水で亡くなっている。

シーク内に残るナバタイの神々

水利システム以外にも、シーク内には多くのナバタイ人の遺跡が残っている。例えばステラと呼ばれる岩に彫り込まれた石板。これはナバタイ人が神としてあがめていたもので、ナバタイの主神ドゥシャラー、女神ウッザーなどが岩壁に彫られている。ほかに、ギリシアの宣教師がペトラを訪れた際に残した碑文や、ナバタイ人のキャラバンを彫り込んだものなどを見ることができる。

シーク拡大図

ナバタイ人の水利システム

ナバタイ人の水源は非常に限られていたが、前4世紀末には、すでに地下貯水槽を造って巧みに雨水を貯め、常時利用できるようにし、彼らだけが砂漠を自由に動き回っていたことが知られている。

高度な水利システムは、古くから古代オリエント各地の大都市に存在した。遠隔地交易で活躍したナバタイ人は、各地の優れた技術を学び、農耕や町造りに取り入れていった。ペトラには、限られた水源を最大限に有効活用するためのダム、貯水槽、分水タンク、水路、水道管といった数多くの水利施設が残されている。

ペトラの主要な水源は約6km東のアイン・ムーサの泉である。初期の時代には、そこから引かれた水路がシーク経由で町の中心部をとおり、最後には西のワディ・シヤーグに合流した。後に水路は土製の水道管に取って代わり、町の隅々に張り巡らされた。このアイン・ムーサの水は、生活用水や市場などに常時使用されていたが、それ以外にも山から流れるワディや雨水など、複数の水源が確保され、乾季や大規模な隊商の到着といった必要時に対応できるようになっていた。また、飲料水の不純物を沈降させるために水槽を連続的に設けたり、高低差を利用して水圧を調節したり、水道管の内側に波状の凹凸を付けてより多くの流量に対応できるようにしたりなど、ナバタイ人独自の工夫も随所に見られる。

高い給水技術を誇るローマ帝国は、新たな征服地ではまず水利設備を整えるのが習わしであった。ペトラは106年にローマ帝国に併合されたが、その水利システムは、すでに当時最高水準に達しており、ローマが手を加えるところなどほとんど残っていなかった。（徳永里砂）

ペトラ博物館に展示されている、ナバタイ人の素焼きの水道管

ヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルトによる
ペトラの「再発見」

十字軍の時代以降、ペトラは西欧世界から忘れ去られた存在になっていた。しかし19世紀に入り、ひとりの西洋人がペトラを「再発見」する。その男はヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルト(Johann Ludwig Burckhardt)。1784年、スイス生まれの探検家、東洋学者。ケンブリッジ大学でアラビア語を学んだ後、シリアのアレッポに渡る。現地ではシェイク・イブラヒムというアラビア語の名前を用い、アラビア語のさらなる習得とイスラームの学習に励むとともに、シリアのパルミラやレバノンなど、周辺地域を多く旅した。

ペトラを「再発見」したのは1812年、ブルクハルトが27歳の時である。ヨルダン南部を探検すべく、ダマスカスを出発したのは1812年6月18日。現地で目立たないようにするため、ベドウィン風の服装をした軽装での旅であった。ガリラヤ湖畔からヨルダン渓谷に入り、サルトを経てアンマンに入る。そこからマダバ、カラク、タフィーラ、ダーナ、ショーバックを経て、ワディ・ムーサにいたった。ほぼ「王の道」に即したルートで、現在アンマンからペトラを訪れる観光客がとおるルートにも近い。この旅行は当初からペトラの発見を目的としたわけではなかったが、ワディ・ムーサにあるという前人未到のすばらしい遺跡の噂を旅の途中で耳にしたブルクハルトは、その遺跡へと立ち寄ることを決意する。しかしながら、地元の住民たちに、遺跡に眠るとされる宝探しが目的であると思われ危害を加えられることを恐れ、ペトラにある、モーセの兄アロンの墓に犠牲の羊を捧げることが目的であると装って、遺跡を訪れる。

現地にて地元の案内人を雇い、1812年8月22日に、いよいよペトラ遺跡へと足を踏み入れた。古代の水道が残るシークを歩いていき、ついに壮麗なる宝物殿(エル・ハズネ)をブルクハルトは目の当たりにする。そこからさらに歩を進めて、ローマ円形劇場、カスル・アル・ビントなど、遺跡内のおもだった場所を訪れる。しかし日没により、ペトラ遺跡の最も奥地にあるアロンの墓までは到達できなかった。翌日、案内人に急かされるまま、元来た道を戻る形でペトラを離れ、マアーンへと向かった。そしてアカバ経由でエジプトへ向かい、9月4日にはカイロに着く。

このワディ・ムーサに残る荘厳な遺跡こそが、歴史に名を留める古代都市ペトラであると、彼は確信した。しかし、ブルクハルトのペトラ滞在はわずか2日のみで、遺跡の詳細な調査記録を残すことはできなかった。宝物殿等について書き留めた簡単なスケッチもあるものの、旅行後に覚え書きで描かれたもので、不完全なものである。エジプトを旅したブルクハルトは、アブ・シンベル神殿の一部を発見する快挙を成すものの、ペトラについては再び訪れることなく、1817年、32歳という若さで逝去してしまう。ペトラ発見について記した旅行記「シリアおよび聖地への旅」が刊行されたのも、彼の死後、1822年であった。しかし、ブルクハルトの「再発見」によりペトラは多くの欧米人に知られるところとなり、これを契機に徐々に欧米人の旅行者や学者が訪れ、ペトラでの考古学調査も始まる。ブルクハルトの「再発見」はその後約200年にわたるペトラの研究、保全、また観光の出発点となったのだ。

(大山晃司)

上／ヨハン・ルートヴィヒ・ブルクハルト
下／ジャバル・ハールーンの頂上にあるアロンの墓

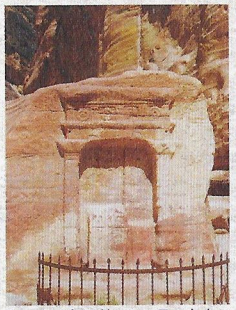
ナバタイ人の神々

元来、ナバタイ人は神の姿を具体的に表すことをせず、無装飾、あるいはふたつの目だけが彫り込まれた簡素なステラ(石柱・石板)を神が宿るものとして崇拝した。これらは神殿の至聖所に安置されたほか、岩壁の祠にも数多く彫り込まれている。ナバタイ人の宗教は多神教で、彼らの国際的な活躍を反映し、さまざまな起源の神々が崇拝されていた。これらの神々は、ヘレニズムおよびローマ文化の影響を受け、ギリシア・ローマ神話の神々と融合するが、それと同時に、ナバタイ人は神の姿を偶像として表すようになる。ここではナバタイ人の信仰していたおもな神々について紹介する。

国家神ドゥシャラー

ドゥシャラーはナバタイ人の主神であり、ナバタイの王たちの神である。ドゥシャラー(「シャラー山の主」)の名はペトラのシャラー山に由来する。その信仰はナバタイ人の諸都市に見られ、特にラベル2世は、ペトラから南シリアのボスラに遷都した際、そこでドゥシャラー信仰に力を入れた。初期イスラーム時代の文献には、南西アラビアの諸部族もドゥシャラーを崇拝していたことが記録されている。

ヘレニズム文化の影響により、ドゥシャラーはギリシアの最高神ゼウスと同一視されるようになった。また、ローマ支配時代になると、ドゥシャラーは豊穣とブドウ酒の神デュオニソスと同一視され、長い巻き毛の若者として表されるようになった。また、ナバタイ人は、彼がイエスのように処女から生まれたと信じていた。



シークにあるドゥシャラーとウッザーのステラ

エドム人の神カウス

カウスは、ナバタイ人の到来以前に南ヨルダンで定住・農耕をしていたエドム人の神で、その信仰はナバタイ人によって引き継がれた。カウスは雨と嵐の神で、ペトラの北およそ70kmのタンヌールの岩山の山頂に聖域があった。配偶神は豊穣の女神アタルガティスとされる。

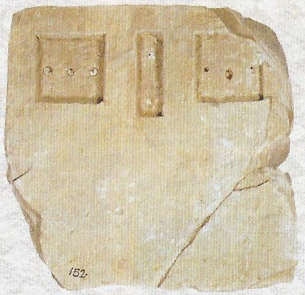
書の神アル・クトゥバ

アル・クトゥバは、その名が「書く」という言葉に由来することから、書き物の神とされる。アル・クトゥバの起源については、同じ役割を担うメソポタミアの神、ナブーとの関係が示唆される。ナブーは、前6世紀中葉、新バビロニア最後の王、ナボニドスが北アラビアに長期滞在した際にそこに伝わり、アル・クトゥバの原型となったのであろう。クトゥバは同じ役割をもつエジプトのトート神とも同一視され、さらにはギリシア神話のヘルメス、ローマ神話のメルクリウスと結び付いた。

ワディ・ラムでは、ふたつの目が象られた簡素なアル・クトゥバのステラがウッザー女神のそれと並んで岩壁に彫り込まれているのが発見された。また、ナバタイ人はアル・クトゥバの信仰をシナイ半島、エジプトのデルタ地方にまで持ち込んでいる。

女神ウッザー

ウッザーは、古代アラブ諸部族の間で長い間、広く信仰されていた女神で、イスラームの聖典『クルアーン』にも言及が見られる。ウッザーはギリシア神話のアフロディーテーと同一視され、金星と結び付けられていた。特に、ペトラはウッザー信仰の一大中心地で、カスル・アル・ビントは彼女を祀った神殿であったと考えられる。



有翼ライオンの神殿から出土したウッザーの像

その他の神々

ナバタイ人は、女神崇拝に熱心で、ウッザーとともに3柱組を成すアラビアの女神、アッラート、マナートも信仰し、それぞれギリシア神話のアテナ、ネメシスと同一視した。また、エジプトのプトレマイオス朝時代に地中海世界に広まったイシス崇拝も、ペトラに伝わった。ローマ時代、イシスはアフロディーテーと同一視されたので、ペトラでは、同じくアフロディーテーと見做されていたウッザーと結び付き、盛んに信仰された。

そのほかにもナバタイ語碑文には、アラビアの神フバルなど多くの神々の名が見られる。また、故郷を離れたナバタイ人は、旅人の守護神シャイィ・アル・カウムの加護を求めた。

(徳永里砂)

アレタス4世により建設された巨大な墓 BC1

エル・ハズネ（宝物殿）

El Khazneh (Treasury)

MAP 折込裏C3

アレタス4世

ナバタイ帝国の最盛期の王。治世は紀元前9～紀元後40年。経済的、文化的に多くの功績を残し、彼が描かれたナバタイコインも大量に見つかっている。ギリシア名をフィロデモスといい、これは"民衆を愛する者"という意味。

さまざまな映画作品に登場

ペトラで最も美しいといわれるエル・ハズネは、しばしば映画の舞台となる。『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』、『パッション・イン・ザ・デザート』など。また、エル・ハズネ以外の遺跡も映画作品に登場しており、『トランスフォーマー2』ではエド・ディル、『モータル・コンバット：アニヒレーション』では王家の墓などが舞台となっている。

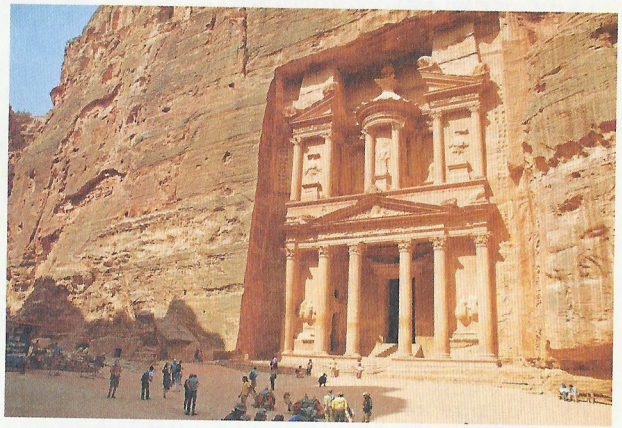
用語解説

ファサード Facade
建築物の正面。西欧建築では建物の外観を重要視し、内部以上に装飾することが多い。一般的に玄関のある面を指すが、正面同様に装飾された側面もファサードと呼ぶ。

ペディメント Pediment
西洋建築における切り妻屋根の三角形の部分。古代ギリシアの神殿建築が原型とされている。

トロス Tholos
ギリシア建築にみられる、円柱の間の円形構造。

イコノクラスム Iconoclasm
聖像破壊運動。モーゼの十戒にある「偶像を造ってはならない」という戒めを根拠として、おもにビザンチン帝国で行われた。



オレンジ色に輝くエル・ハズネ

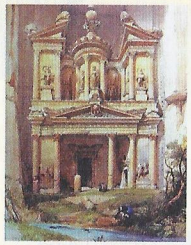
ペトラのハイライト

1.2kmのシークを抜けると、ペトラの遺跡で最も壮麗とされるエル・ハズネが現れる。現地ではハズネ・フィルアウンKhazneh Fir'aun、"ファラオの宝物殿"と呼ばれている。この巨大な建造物は、紀元前1世紀にナバタイの王アレタス4世が建設した、葬祭の儀式を行うための墓あるいは葬祭殿のようなものであったとされている。驚くべきことに、岩山の上から下へ、壁面を削りながら建造された。

緻密な装飾を施されたファサード

高さ45m、横幅30mという巨大なファサードには、緻密な美しい彫刻が施されている。様式はアレクサンドリア・ヘレニズム様式で、エジプトやギリシアの影響が見られる。ファサードの一番上に彫られた壺は、バビロニアでもよく見られる永遠のシンボル。銃で撃たれた跡が見られるが、これはエジプトのファラオの宝が隠されているという話を信じたベドウィンらが銃撃したものだ。ブロークン・ペディメント（左右に分かれたペディメント）の上に配置されているのは4体のワシ。そして上部のトロスの真ん中に彫られているのは、エジプトの女神**イシス**、もしくはナバタイの女神**ウッザー**。そのすぐ下、ペディメントの上部には**イシス**の象徴である豊穣の角**コルヌコピア**が彫り込まれている。さらにその下、ペディメント内には**メデューサ**の首が描かれている。イシスの両脇には、ギリシア神話より運命の女神**テュケー**（右）、勝利の女神**ニーケー**（左）。シークからまず初めに見えるのが、平和の象徴であるこのテュケー像だ。脇を固めるのが4体の**アマゾネス**。下段の左右の像は、同じくギリシア神話よりゼウスの息子、**ポルックス**（左）と兄**カストール**（右）。残念なことに、これら神々の顔はイコノクラスムにより破壊されている。いずれも"死"にかかわる神々であり、このことはエル・ハズネが葬祭の儀式に深くかかわっていたことを示唆している。

エル・ハズネのファサード



デイビッド・ロバーツが描いたエル・ハズネのリトグラフ

画家デイビッド・ロバーツ

スコットランドの画家、デイビッド・ロバーツDavid Roberts（1796～1864年）は1838年からの2年にわたる中東旅行の間に書いた多くの作品で知られる。具体的にはエジプト、レバノン、ヨルダンを旅しており、エジプトではスフィンクスやオベリスク、ペトラではエル・ハズネやエド・ディルなどを描いている。上の画を見てもわかるように、彼がエル・ハズネを描いた1839年当時は、エル・ハズネの前を小川が流れ、左から三番目の円柱は崩れ落ちていた。円柱は1960年代に修復された。

周辺国の影響／内部の構造

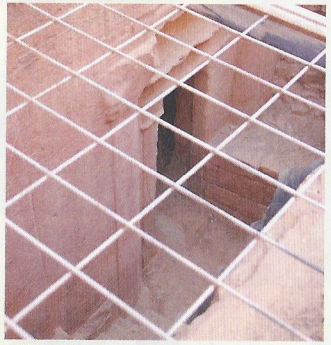
12本の柱は（再発見当時は下段左から3番目が折れた状態だった）ギリシアのコリント様式で、12の月を表している。また、ペディメントと柱の間に描かれた7つのグラスは週を、ペディメント上部の30の花は日を表している。下段の円柱頭部の植物模様などはナバタイ人独自の装飾であるが、エル・ハズネのファサードは周辺国の文化が強く意識されている。これは、ナバタイ人の他民族に対する友好的な姿勢を表しているといわれている。

装飾の限りを尽くしたファサードと違い、内部は極めて質素な造りになっている。円柱を抜け、まず左右には儀式の際に待合室として使用された部屋。ホールは儀式が執り行われる部屋で、左右に儀式に必要なものを治める倉庫、奥の部屋は墓になっている。2013年8月現在、壁面への落書きが多いため、中に入ることはできない。

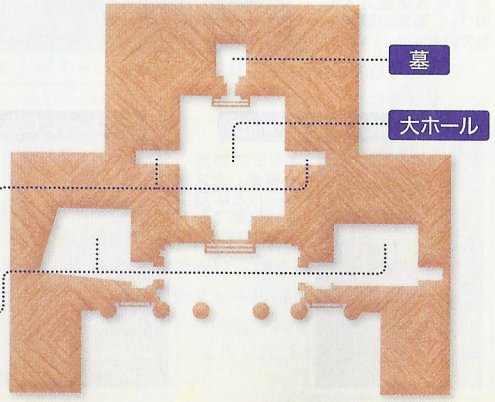
2003年、地下部分を発掘

2003年、ヨルダン考古局によるエル・ハズネ地下の発掘が行われた。シークから続く石畳がエル・ハズネ手前300mあたりで突然消えていることから、エル・ハズネ前の広場は洪水による土砂が堆積しているのではないかと推測されたからだ。その結果、地下6mに4つの部屋が発見され、中からは11体の人骨、ナバタイ土器を含む副葬品が見つかり、紀元前1世紀にアレタス4世により建設されたことが判明した。もっとも、アレタス4世と思われる人骨は見つかっていない。さらに、北側の墓の前にある祭壇では、当時のまま保存された乳香とみられる物質も発見されている。

発掘された円柱前。中へ入ることはできない



王族が埋葬されていた廟へと続く扉

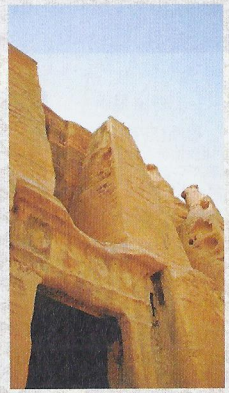


エル・ハズネ見取り図

ナバタイ人の死生観

「死者の亡骸をごみ同然と考えているところは、ヘラクレイトスが『死体は糞尿よりも先に外へ捨てた方がよいからだ』というのに似ている。だから、王の亡骸でもごみ捨て場のすぐそばに穴を掘って葬ることもある。」*――これは、地理学者ストラボン（前63年頃～後23年頃）の言葉であるが、ペトラの荘厳な墳墓を見れば、誰もがこの記述に疑問を抱くに違いない。これに関しては、ギリシア人が、ナバタイ語で墓を意味する「カブラー」をギリシア語の糞「コプロス」と勘違いしたのではないか、という説もあるくらいである。

しかし、庶民の墓に関しては、ストラボンの記述は当たらずといえども遠からずで、それらは簡素極まりない。庶民の墓地は、「魂」を意味するネペシュ（ネフェシュ）と呼ばれるオベリスク形のステラの形が刻み込まれた石が墓石として置かれているだけである。実は、このネペシュ・ステラこそが、ナバタイ人の死生観の最も重要な部分を示すモニュメントで、ペトラの岩窟墓や岩壁にも見ることができる。ナバタイ人は、神が石やステラに宿るのと同様、人間の魂も死後、ステラに宿ると考えていた。ネペシュ・ステラの起源は、古くは前6～前4世紀頃の北アラビアのオアシス都市タイマーの墓にたどることができる。そこでのステラと魂に関する考え方が、ナバタイ人の死生観に大きな影響を与えたのであろう。



オベリスクの墓のネペシュ・ステラ

また、死者に関する重要な儀式としては、墓での饗宴が挙げられる。王家や貴族の岩窟墓でも庶民の墓でも同様に、ナバタイ人は定期的に墓に集まって死者のための饗宴を行っていた。岩窟墓には、饗宴のための空間（トリクリニウム）が設置されている。（徳永里砂）

* ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』II、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994年、P. 538より一部改変。

さまざまな岩窟墓

ペトラの岩窟墓の初めての型式学的研究は、20世紀初頭にドマゼヴスキーによって行われた。その後微調整が加えられたものの、岩窟墓のファサードの分類は、現在もほぼ彼の分類を踏襲している。

甍（いらか）段状墓（Crowstep Tomb）…ファサードに急な階段状の装飾が施されているもの。全体の形状から塔門墓（Pylon Tomb）、あるいは装飾段の形状がアッシリアのそれに類似していることからアッシリア風（Assyrian）とも呼ばれた。（例→P.64欄外上の写真）

方形墓（Cube Tomb）…方形に切り出された岩に、列柱式の建物の外見が浮彫になっているもの。通称ジン・ブロックと呼ばれているものが、このカテゴリーに分類される。（例→P.54ジン・ブロックス）

階段状墓（Step Tomb）…階段状の装飾と、エジプトの建築に見られるようなカヴェットが見られるもの。カヴェット・タイプ（Cavetto Type）とも呼ばれる。カヴェットの下に柱があるものはプロト・ヘグラ・タイプ（Proto-Hegr Tomb）、さらに2段のカヴェットの間に4本の短い柱の装飾があるものがヘグラ・タイプ（Hegr Tomb）。（例→P.54欄外上の写真）

アーチ状墓（Arch Tomb）…入口を挟む2本の柱の装飾の上に、アーチが彫り込まれているもの。（例→P.69セクスティウス・フロレンティヌスの墓）

切妻状墓（Gable Tomb）…柱に支えられた三角形の切妻の装飾があるもの。切妻状墓にアーチ装飾などが加えられより複雑に造られているものは神殿墓（Temple Tomb）と呼ばれる。2階建てのファサードや、複数の入口がある墓も存在する。ヘレニズムの影響が強い。（例→P.60エル・ハズネ）

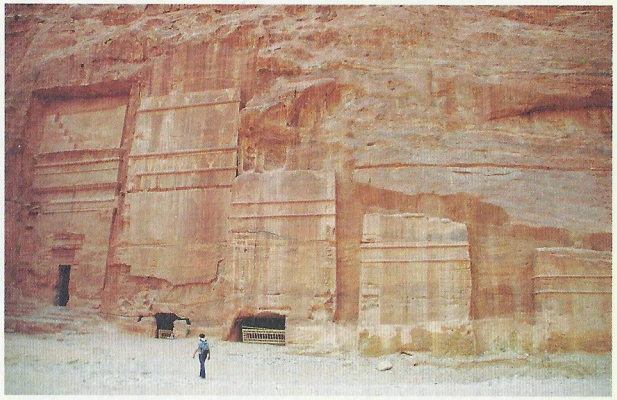
ペトラの岩窟墓の編年に関しては、簡素な型式から、装飾が複雑なものに発達するという流れが考えられるが、年代決定の手掛かりがなく、正確なことはほとんどわかっていない。ナバタイ人の南の都ヘグラ（現在サウジアラビアのマダーイン・サーレハ）では、それぞれの岩窟墓の墓碑に、所有者の名、墓の売買の禁止、建造年、石工の名などが刻まれているが、ペトラの岩窟墓にはそういった基本情報が欠けているのである。多様な出自の人々が、入れ代わり立ち代わり行き来していたヘグラに対して、ペトラの住民は何代にもわたってそこに住み続け、誰もが知っている墓の所有者の名など、記す必要すらなかったのではないかともいわれる。ペトラの墓の年代・所有者の解明は、研究が始まって100年以上経過した今もなお、大きな研究課題である。（徳永里砂）

40以上の墓が連なる　BC1

ファサード通り

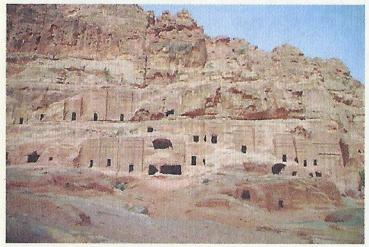
Street of Façade

MAP 折込裏C3



2000年前に比べると地面が数m上がっている

階段状の装飾



岩山に造られた岩窟墓群

エル・ハズネを抜け、アウター・シークOuter Siqと呼ばれる広い通りに出ると、左側にファサード通りが見える。すぐ左に見える67番の墓から始まる一連のファサードがまず姿を現すが、背後の岩山にも、崖の高さによりファサードが4列ほど並んでいるのが見える。さらにローマ円形劇場周辺にも2列のファサード群が見られる。これらの墓は階段状の装飾、長方形の入口を共通のデザインとしてもち、紀元前7～6世紀のメソポタミア、アッシリア帝国の影響が見て取れる。ナバタイ人は死者の魂がこの階段を伝って天国へ昇ると信じていた。

67番の墓は上記以外に、ヘレニズム様式のペディメントをもつ。盗人がこの墓に隠れ住んでいたという昔話が残っており、現地では“盗人の墓”とも呼ばれている。上下に入口があり、下の入口を入ると、地面が低く、表の通りが土砂により数m高くなっているのがわかる。ビザンチン時代の水路の建設により、この入口は閉ざされたが、1998年の考古局による発掘では、この水路が盗掘人、もしくは洪水により一部破壊されていることがわかった。

用語解説

ファサード
→P.60欄外

ペディメント
→P.60欄外

ポーチコ
Portico
柱廊式玄関

ペトラにおける岩窟墓のファサード

ペトラには数え切れないほどの岩窟墓が確認されているが、それらのファサードには東方のメソポタミア、西方のギリシアなどの文化的影響が見られる。例えばアッシリアでよく見られた階段状の装飾や、ギリシアスタイルの柱、ペディメントなどである。これらファサードは、オベリスクの墓(→P.55)におけるオベリスクのように、“ネペシュ”(魂、聖霊、自身)を表現していると考えられている。そして階段状の装飾は埋葬されている人の数を表している。稀にポーチコ(柱廊式玄関)や宴会場が併設された墓もあり、そこでは残された者たちが死者を記念して宴会の儀式を行った。

儀式の場として使用された　BC1

ローマ円形劇場

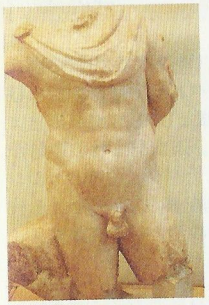
Roman Amphitheater

MAP 折込裏C3

グレコ・ローマン様式の劇場で、紀元前1世紀頃、最盛期の王アレタス4世により建設された。その後、同じくナバタイの王マリクス2世による改装工事の後、106年以降のローマの支配下において客席が拡張され、約45段ある客席に最大で8500人収容可能となった。最終的に363年の大地震により大きな被害をこうむり、現在はステージ部分など多くの個所が破壊されたままである。1960年代に行われた発掘では、頭部のないヘラクレスの像が見つかっており、現在はペトラ博物館に所蔵されている。

遺体が保存された洞窟

建築当初、この劇場は喜劇や悲劇を興行する通常のローマ劇場とは異なる使われ方をしていた。背後に迫る岩壁には、ロクリLoculiと呼ばれる洞窟がいくつも彫られている。これは遺体を保存するためもので、劇場と並行して造られた。一説によると、この劇場はエンターテインメント用に建設されたのではなく、アレタス4世が自身の葬儀場として建設したものであるという。この劇場を含め、ペトラにはナバタイ人の葬祭に関する遺跡が多くみられるが、これはペトラが記念碑的な建造物が多く造られた神聖な土地であったことを示している。



発掘された頭部のないヘラクレスの像

用語解説

ローマ円形劇場
Roman Amphitheater
古代ギリシアの影響をうけ、ローマ人が発展させた半円形の劇場。グナエウス・ポンペイウスが造った劇場を見本として、ローマ帝国の版図であった北アフリカ、中東、ヨーロッパに多数建設された。演目はおもに演劇、パントマイム、合唱、演説など。

アレタス4世
→P.60欄外

劇場の音響
劇場の背後には岩壁が屹立し、見事な音響的効果を成し遂げている。1989年5月、ピアニスト、ジョン・ブリッグスJohn Briggsによるピアノコンサートが開かれ、彼は会場の音響に関して「カーネギーホールやシドニーのオペラハウスに何らひけをとらない」というコメントを残している。

ジャバル・フブサ(→P.93)から望む劇場の全景

生贄の儀式が行われた

BC1

犠牲祭壇

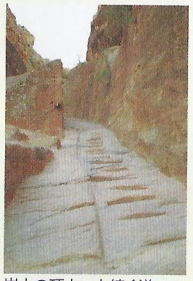
High Place of Sacrifice

MAP 折込裏C3

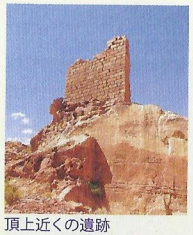
繁殖の象徴？

生命の力、繁殖のシンボルであるオベリスクがあることから、このあたりはベドウィンによりZibb Attoufと呼ばれている。Zibbとはアラビア語で男根の意味。

2本のオベリスク



岩山の頂上へと続く道



頂上近くの遺跡

アレタス4世とその妻

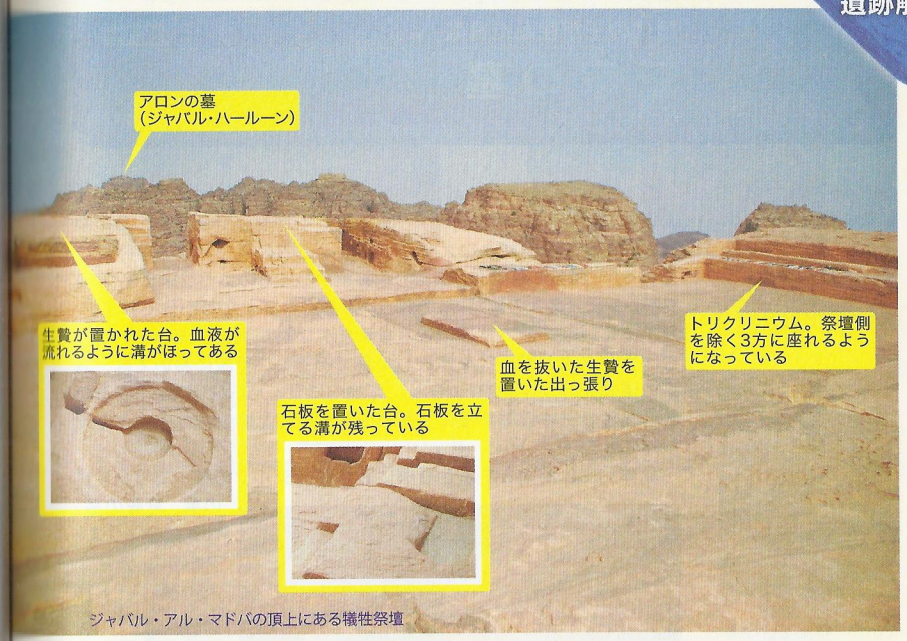
アレタス4世の妻であるフルドゥは、もともとアレタス4世の兄弟であった。聖書によると、ふたりの娘はヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパスに離縁を言い渡されている。怒ったアレタス4世はヘロデ・アンティパス率いるユダヤ軍と戦い勝利する。その結果、北方のダマスコ（現ダマスカス）を攻略することに成功する。

2本のオベリスク

ジャバル・アル・マドバJabal Al Madbah（犠牲祭壇の山）の頂上に、ナバタイ人が神に生贄を捧げたとされるペトラで最も神聖な祭壇がある（古代アラブ人は山などの高所を聖域としていた）。頂上までは45分ほどのトレッキングとなる（→P.91）。まず見られる遺跡が**2本のオベリスク**。高さ6mほどで、それぞれナバタイの神ドゥシャラーと女神ウッザー、あるいは女神の豊穣の角を表しているとする説がある。古代ナバタイ人は、神を人間や動物の姿として表象することはなく、自然そのものである石や岩を、石板やオベリスクに加工しあがめた。驚くべきことに、ふたつのオベリスクは岩を別の場所で切り出してここに建てているのではなく、周りの岩を削り、ふたつの塔を削り出している。さらに驚かされるのは、この岩山の頂上にある祭壇部全体が砂岩をフラットに削ってできたものだということである。

生贄が捧げられた聖なる祭壇

オベリスクへと左に曲がった道を右に登っていくと犠牲祭壇にたどり着く。まず**貯水槽**Cisternとして使われていた長方形の穴があいている。ここは雨水を貯める溜め池で、生贄の儀式の前に身を清めるなどした場所だ。歩を進めると真ん中に出っ張りのある**トリクリニウム**（14.5m×6.5m）がある。ここには、“アレタス4世とその妻フルドゥHulduに捧げる”といった内容の建設者の碑文が残っている。出っ張りは神官が説教をする場、もしくは血を抜かれた生贄が置かれた場所と考えられている。そして3段の階段の先には**祭壇**がある。儀式の間、神の像が配置された場所で、石板を立てる溝が残っている。その左にある台には円形くぼみがあり、ここに殺された生贄の動物が置かれ、その血液は溝を伝って祭壇の下へと流れ落ちた。人間の生贄が捧げられたかどうかについては定かではないが、ペトラ以外の地では人間の生贄をほのめかす碑文が残っている。



ジャバル・アル・マドバの頂上にある犠牲祭壇

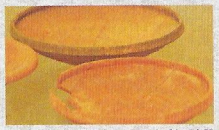
ナバタイ人の宗教儀式

古代オリエント世界の宗教儀式の重要な要素のひとつに、神々への奉献の儀式がある。彫像、奉献台、碑文、建物、動物、香料など、様々なものが神に捧げられた。この点は、ナバタイ人の宗教においても同様である。

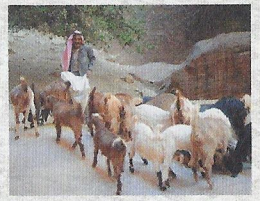
聖域への巡礼や願掛けなどの折には、神に犠牲が捧げられた。一般的に犠牲獣とされたのはヒツジ、ヤギ、ラクダである。犠牲祭壇周辺の水利が整っているのは、屠った犠牲獣を素早く解体して人々に提供するためである。神殿には、饗宴のための部屋が設けられていた。そこからは、飲食に使われた土器類が数多く出土している。

日常の重要な神々への捧げものは香料である。神殿では乳香、没薬などをはじめとする香が頻繁に焚かれた。立ち上る白い煙と芳香は、神への奉献物であると同時に、神聖な空間を演出するのに欠かせないものであった。

大規模な神殿の至聖所での儀式には幕がかけられ、神官などによる密儀として行われていたようである。しかし、地理学者ストラボンが「人々は住居の上に祭壇を築いて太陽を祀り、毎日祭壇に神酒を注ぎ、香を焚く」*と述べているように、祭壇はいたるところに設けられ、人々は神殿以外でも日常的に宗教儀式を行っていた。



ペトラ博物館に展示されているナバタイ土器



ペトラ遺跡近郊でヤギの放牧をするベドウィン

また、人々は重要な決定に関して、しばしば神々の信託を求めた。鳥の飛行から未来の出来事を占う、鳥占いも行われていた。

ナバタイ人の宗教儀式の雰囲気を今に伝える資料は非常に限られている。しかし、ヘブロン近郊からやって来た修道士エピファニウスによる4世紀の記述に、当時のナバタイ人たちが、処女女神とその子ドゥシャラーの生誕を祝う讃美歌を歌っていたとあるので、宗教儀式は比較的賑やかに行われていたのかも知れない。（徳永里砂）

（*ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』Ⅱ、飯尾都人訳、龍溪書舎、1994年、P. 538より一部改変）

歴代の王が住んだ宮殿　BC1〜

王家の墓

Royal Tombs

MAP 折込裏C2

マリクス2世
在位は40〜70年。ナバタイ王朝最後から2番目の王。ナバタイ王は代々ギリシア名をもつが、マリクス2世のギリシア名は判明していない。

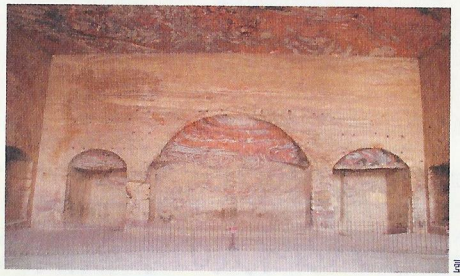
用語解説

トーガ
Toga
古代ローマで用いられた一枚布の上着。おもに男性が着用した。

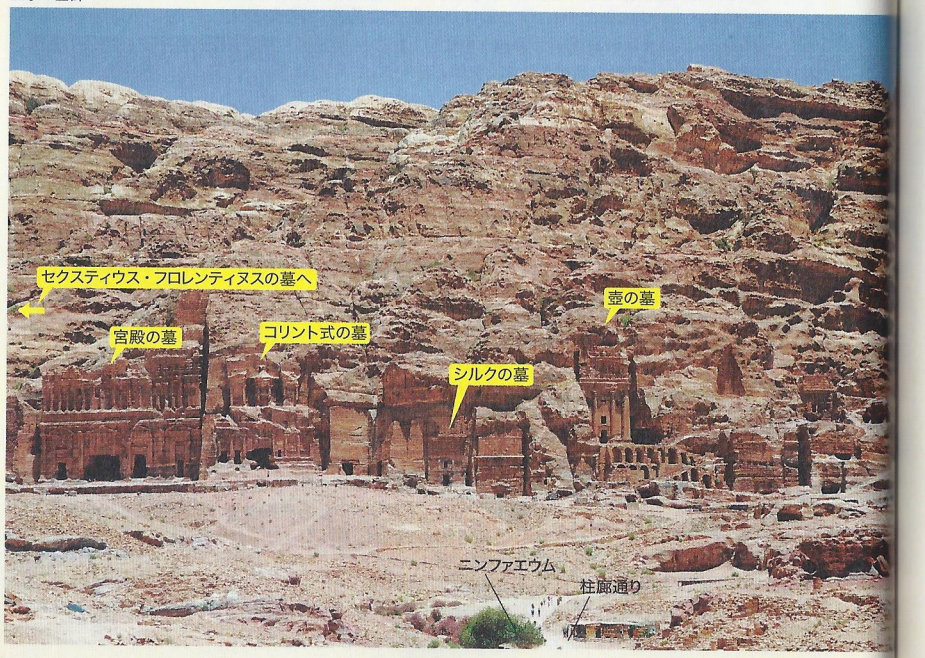
ペディメント
→P.60欄外

ジャバル・フブサJabal Khubthaの西側の壁面にずらりと連なる岩窟建築群。一つひとつがまったく異なるデザインをもち、その規模はペトラでも有数といえる。これらは王家の墓という名で呼ばれているが、実際に墓であったという確証があるものはセクスティウス・フロレンティヌスの墓だけ。それ以外は詳しいことがわかっておらず、墓、あるいは神殿、宮殿など、さまざまな説が乱立している。これらはナバタイの王が代々建設した墓であるという説においては、葬祭の儀式を行うトリクリニウムが建物内に見あたらないということから、歴代の王は犠牲祭壇にて葬儀を執り行ったのではないかと考えられている。

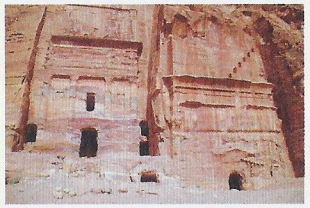
具体的には向かって右から順に**壺の墓、シルクの墓、コリント式の墓、宮殿の墓、セクスティウス・フロレンティヌスの墓**。いずれも、紀元前1世紀前後に王などの身分の高い人物によって建設されている。



壺の墓の内部



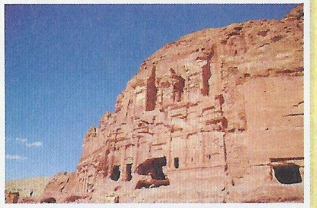
エル・ハビス城から見た王家の墓群



左がシルクの墓

シルクの墓

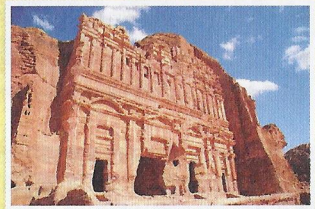
壺の墓のすぐ北にはいくつか小規模な墓が並ぶが、2番目がシルクの墓と呼ばれている。別名、虹の墓。王家の墓では群を抜いて小規模だが、その名が知られているのは、ファサードに使われた砂岩の模様の美しさによる。王家の墓であるとはいわれているが、詳細ははっきりしていない。アレタス2世の別宅という説もある。



エル・ハズネに似たフォルム

コリント式の墓

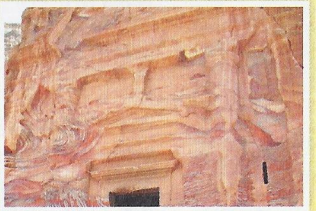
エル・ハズネ(→P.60)にそっくりの墓。その名のとおり、コリント式の円柱をもつ。エル・ハズネと同時期か、それ以前に建設されたといわれているが、これも詳しいことはわかっていない。下層階のポーチコ(柱廊式玄関)はナバタイ様式で、上層階にはギリシアの影響が見られる。アレタス2世の宮殿という説がある。



風化の進む宮殿の墓

宮殿の墓

3階層からなる、王家の墓では最も巨大な建築物。ローマ皇帝ネロ(在位54〜68年)のゴールデン・ハウスGolden Houseを模倣したものであるとされている。その手の込んだ装飾から、アレタス3世など、ナバタイの王の宮殿であったという見解がある。左上部は切り出した長方形の岩で補完されている。



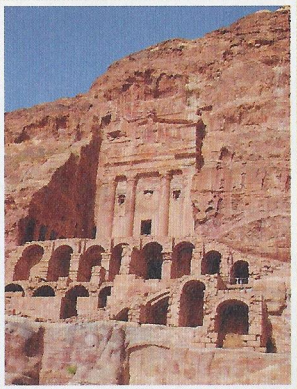
独特のファサードが見られる

セクスティウス・フロレンティヌスの墓

127年、ハドリアヌス帝の治世に、ローマ帝国アラビア州知事に就任したセクスティウス・フロレンティヌスの墓。戸口に残されたラテン語の碑文曰く、彼の遺志によりその息子がこの墓を建設した。ペディメントには風化したメデューサの首が見える。円柱には角が生えており、これはナバタイ独特のものだ。

壺の墓

ファサードの頂点に、壺の彫刻が見られることからそう呼ばれている。現地名はアル・マフカマAl-Mahkamahといい裁判所を意味する。ただし、法律に関するものは何も見つかっていない。この建物が何であるかについては諸説ある。ひとつはアレタス4世(在位前9〜後40年)の宮殿であり、その家族を埋葬した墓であるという説。また、マリクス2世(在位40〜70年)の墓であるという説もある。いずれにしても、ここには王が住み、民が訪問することもあったと考えられている。ファサードは古いナバタイ様式で、上にあけられた穴は、死者の魂が建物から出られるように。真ん中にはトーガを身につけた男性の像が見える。アーチ部分はビザンチン時代に増設されたもの。アーチ奥には部屋があり、罪人が収容されたという。柱はコリント式。建物内部にはギリシア語の碑文が残っており、5世紀にキリスト教会として転用されたということが書かれている。



高台になっているので景色がよい

朽ち果てたかつての市街地 BC1～

柱廊通り

Colonnaded Street (Petra City Center)

MAP 折込裏B2

用語解説

カルド・マキシマス Cardo Maximus
カルドとは、ローマ帝国の都市計画における、南北に走る道のこと。カルドには商店などが多く並び、経済の中心として機能した。主要なカルドのことをカルド・マキシマスと呼ぶ。対して、東西に走る道はデクマヌスと呼ばれ、第二の大通りとしての機能を果たした。

ニンファエウム Nymphaeum
泉の精であるニンフを祀る噴水。ギリシア発祥で、ローマの時代に発展した。ヨルダンにはアンマンやジェラシュにもあり、ジェラシュのものは比較的原型をとどめている。

柱廊通りの端に位置する凱旋門

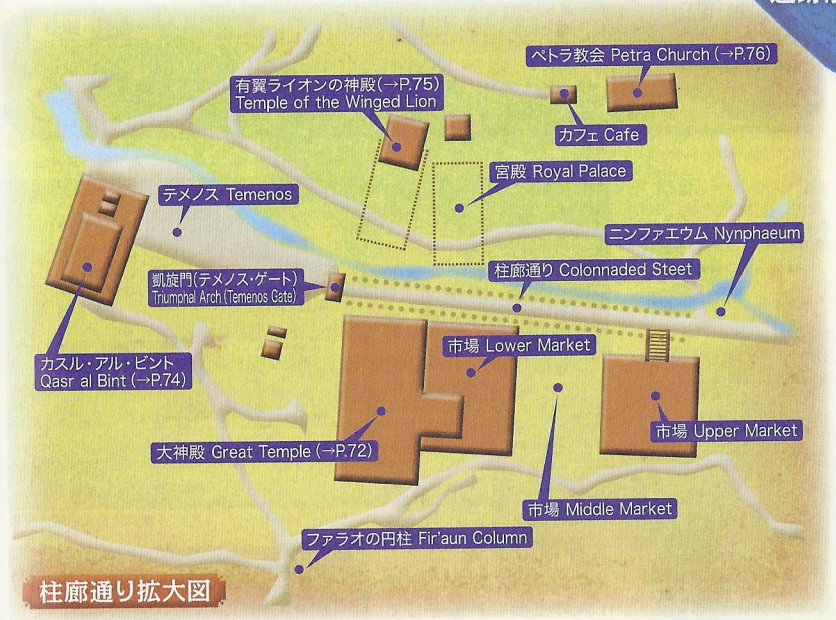
ペトラの中心部

ニンファエウムからカスル・アル・ビントまで続く**柱廊通り(カルド・マキシマス)**は、全長225m、幅10m。大きな大理石を敷き詰めて造られている。ローマ帝国の属州となった紀元106年、もともとあったナバタイ人の通路を大改装して造られた。

まず柱廊通りの入口にあたる場所に鎮座するのが、生命の源である水を讃える噴水施設、**ニンファエウム**。ワディ・ムーサ、ワディ・ナサラから流れてきた水がここで合流し、さらに柱廊通りに沿って流れていった。設置されたのは191年。ジェラシュのものとまったく同じ年に建てられている。柱廊通りと同じく、ローマ帝国の支配下に入ってからだ。現在の朽ち果てた姿からは想像できないが、かつては手の込んだ装飾が施された立派な噴水で、神聖な場所として人々の心を潤していた。ちなみに、現在残っている土台の背後にはピスタチオの木があり、樹齢はなんと約400年だという。

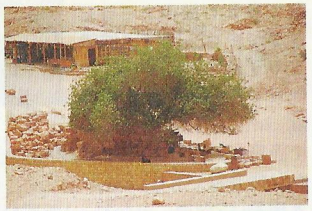
柱廊通りの西の端はローマ皇帝トラヤヌス(在位98～117年)の**凱旋門** Triumphal Arch(ナバタイの王アレタス4世の凱旋門との説もあり)。現在は失われているが、かつては巨大な木造の門がこの先の聖域と柱廊通りを分けており、門の両脇には塔がそびえ立っていた。この先はテメノスと呼ばれる聖域で、その先にはペトラで最も重要な寺院のひとつ、カスル・アル・ビント(→P.74)が控えている。

ジャバル・フブサから望む柱廊通り



柱廊通り拡大図

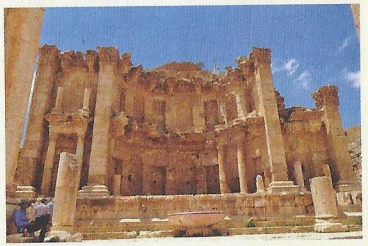
テメノスは、カスル・アル・ビント前に広がる広場で、凱旋門からカスル・アル・ビントへ続く直線と、ワディに囲まれている。南側は2段のひな壇になっており、セレモニーの際にはここに人々が並んだという。ひな壇の上段は後から付け加えられたことがわかっているが、この段はアレタス4世に捧げる像を建てる段だったということが判明しているため、下の段、そしてカスル・アル・ビントの建設はそれ以前、オボダス3世の時代にまでさかのぼるとみられている。



ニンファエウム跡とピスタチオの木

用語解説

テメノス Temenos
公的なエリアとして定められた土地を指すギリシア語。特に神や王、長などに捧げられる場所で、いわゆる聖域。



ジェラシュのニンファエウム

重要な建築物が並ぶ

それぞれ以降のページで詳しく説明するが、柱廊通り沿いには重要な建築物が集まっており、かつてこの通りがペトラの中心地だったことがうかがえる。まずはニンファエウムから向かって、凱旋門の手前にあるのが**大神殿**(→P.72)。ナバタイ人の主神ドゥシャラーを祀る大規模な神殿だ。神殿の脇には、浴場跡が残っている。そして通りを挟み向かいにあるのが、大いなる女神ウッザーを祀る**有翼ライオンの神殿**(→P.75)。その隣には**宮殿**があったとされる。もっとも現在はその痕跡を見つけるのは容易ではない。宮殿の向かいには**市場**があり、3段階に分かれていた。

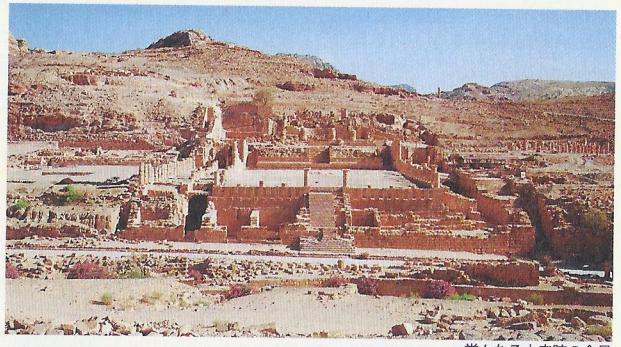
トラヤヌス帝
在位98～117年。ローマ五賢帝のひとりで、ローマ帝国の最大版図を成し遂げた。ナバタイ最後の王ラベル2世が病気で没すると、すぐにペトラに出兵している。

オボダス3世
在位は前30～前9年。篤い信仰心をもっており、弟のアレタスは彼を神聖視していたという。

ペトラで最も規模の大きい建造物 BC1

大神殿
Great Temple

MAP 折込裏B2


堂々たる大寺院の全景

用語解説

テメノス
→P.71欄外

バシリカ
Basilica
教会建築における、中央の身廊を側廊が取り囲む建築形式。ギリシア語で「王の列柱廊」を意味するバシリケーが由来とされている。

大神殿の構造

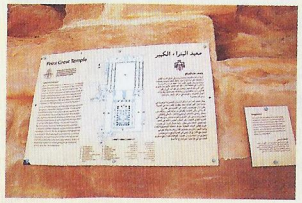
約600人を収容可能なテアトロン

紀元前1世紀にナバタイ人の主要な神殿として建造され、4世紀の大地震で多大な被害をこうむりながらも、修復、拡張工事を経てビザンチン時代まで使用された。高さは18m、縦40m、幅28mで面積が7500㎡。岩壁に彫られた建築物を除けば、ペトラで最も巨大な建造物である。

テメノスに敷かれた6角形の床石

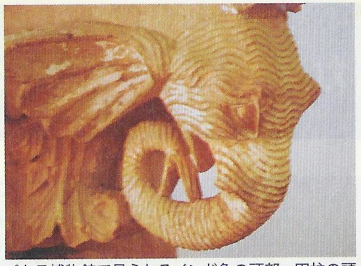
建物は2階層に分かれ、1階部分は6角形の床石が敷き詰められた**テメノス**で、両脇に3列の列柱が並ぶ。2階は神殿になっており、600人収容の小規模な劇場型の**テアトロン**がきれいに残されている。これは1世紀に設置されたもの。神殿部の斜め後ろには**居住区跡**、2階層をつなぐ階段の東にはビザンチン時代の**浴場跡**が残っている。浴場は四角い部屋に円形のドーム。現在でも中東でよく見られるハンマームの形だ。そして建物全体の地下には**水路**がとおっており、ワディ・ムーサへと水が流れ込んでいた。西玄関では象の頭部で装飾された円柱が見つかっており、ペトラ博物館で見ることができる。そのほか、さまざまな大きさの円柱、アーチ形の回廊、随所に施された彫刻、赤と白の漆喰など、当時最高の建築技術をもって建設されている。

ブラウン大学による案内板

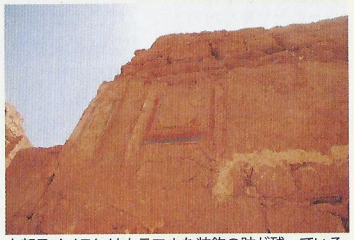


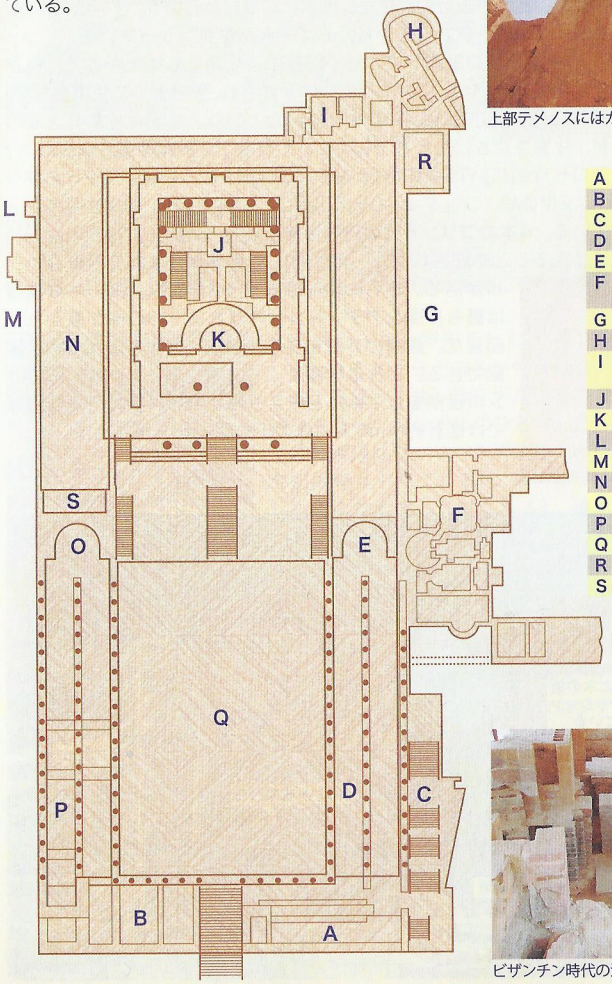
1993年から続くブラウン大学による調査

ペトラでも最重要な遺跡であるということで、1993年からアメリカのブラウン大学による発掘調査が行われている。これまでに出土しているのはふたつの石板、角のある祭壇、像が彫られた石、テュケー（ギリシア神話における幸運と繁栄の女神）の頭部、ナバタイコイン、ナバタイ土器、ラテン語の碑文など。大神殿という名称は、この建物がギリシアの神殿の形態に酷似しているために付けられた通称だが、ギリシアの神殿は円柱が建物の外側を取り囲んでいるのに対し、円柱は建物の内部にあったことが判明した。このことから、この建物はもっと世俗的な、ナバタイの王が演説をするための、ギリシアでいうバシリカのようなものであったのではとの推測が成り立つ。現在この建物は、建築当初はなんらかの集会場、もしくはトレードセンターで、後に評議会場、あるいは宗教的なパフォーマンスが行われる場所に造り替えられたと考えられている。


ペトラ博物館で見られるインド象の頭部。円柱の頭に施された装飾

◆ブラウン大学
Blown University
URL www.brown.edu/Departments/Joukowsky_Institute/Petra/
上記ウエブサイトで1993年以来の発掘調査の概要、出土品の写真など、大神殿発掘調査プロジェクトの情報を得ることができる。


上部テメノスにはカラフルな装飾の跡が残っている



A	西ホール West Propylaeum
B	東ホール East Propylaeum
C	西入口階段 West Entry Stairs
D	西地下回廊 West Cryptoporticus
E	西玄関 West Exedra
F	ビザンチン浴場 Roman Byzantine Bath Complex
G	西の壁 West Precinct Wall
H	居住区 Residential Quarter
I	バロック式の部屋 "Baroque" Room Complex
J	神殿 Temple
K	テアトロン Theatron
L	大貯水槽 Great Cistern
M	東の壁 East Primeter Wall
N	上部テメノス Upper Temenos
O	東玄関 East Exedra
P	東3列柱 East Triple Colonnade
Q	下部テメノス Lower Temenos
R	プール Natatio ／ Cistern Reservoir
S	東貯水槽 East Cistern

ビザンチン時代の浴場跡

ペトラで最も重要な神殿 BC1

カスル・アル・ビント

Qasr al Bint

MAP 折込裏B2

オボダス3世
→P.71欄外

地震
ペトラを含むこのエリアは地震が多く、この2000年ほどの間に10回以上の大地震が起きている。特に363年の大地震は規模が大きく、ペトラの大部分が破壊され、それ以降ペトラの繁栄は陰り始めた。

用語解説

セラ
Cella
古代ギリシア、ローマの神殿の内陣。

アディトン
Adyton
セラ(上記)内最奥の立ち入り禁止エリア。神像安置所。

もし大神殿(→P.72)がただの集会場で、ナバタイの神ドゥシャラーを祀る神殿でなかったとすると、カスル・アル・ビントこそがドゥシャラー神を祀る、ペトラでも最重要な神殿ということになる(ウッザーを祀る神殿との説もあり)。たとえそうでなくとも、テメノス・ゲートTemenos Gateとも呼ばれる凱旋門により俗界から隔離されたこの建物は、ナバタイ人にとって重要なものであることに変わりはない。正式名のカスル・アル・ビント・フィルアウンは"ファラオの娘の宮殿"という意味で、その由来は現地に伝わる逸話から。エジプトのファラオが治水技術をもつ技術者に、カスル・アル・ビントに水を引くことができたら娘を差し出すと約束したという。言い伝えだが、実際にカスル・アル・ビントのそばで水路が見つかっている。

建物は紀元前30年、オボダス3世により建てられたもので、保存状態は非常に悪い。ローマ時代には改修され、教会として使用された。それ以降は馬小屋として使われていたという。まず手前に見えるのが、生贄をささげたと考えられている祭壇だ。神殿の高さは23mで、入口へは幅広い**19段の階段**が続いている。ここではナバタイのマリクス2世の娘、シュダットShuudatにより捧げられた**碑文**が見つかっている。**4本のコリント式の円柱**を抜けると、入口だ。神殿内は司祭しか入ることを許されなかった。中には**セラ**と呼ばれる神聖なホールがある。さらに奥には部屋が3つあり、真ん中の部屋は最も神聖な**アディトン**と呼ばれる、神の像が置かれた部屋だ。建物の外壁を見ると水平に埋め込まれた線が確認できる。これは地震による被害を防ぐためのクッションの役割をしていたと考えられている。また、発掘調査では推計約6mの人物像の手の部分が発見されている。

ローマ時代に施された装飾

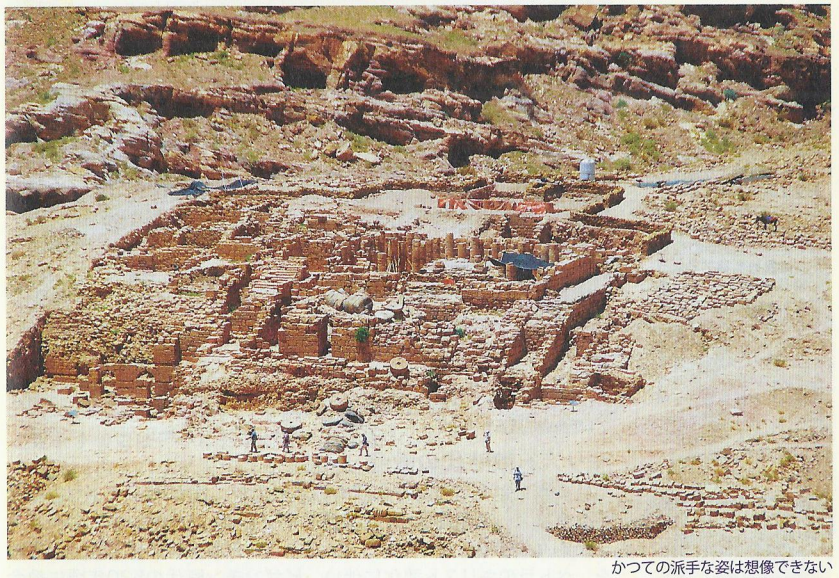
今にも崩れそうなほどに風化している

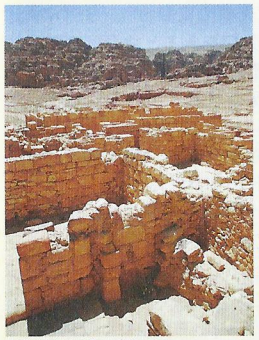
女神を祀る神殿 BC1

有翼ライオンの神殿

Temple of the Winged Lions

MAP 折込裏B2


かつての派手な姿は想像できない

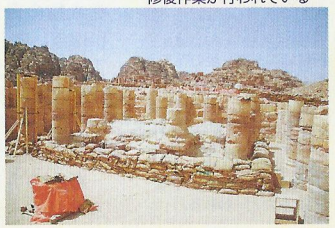

建物の土台だけが残っている

有翼ライオンが彫られた円柱が見つかったことからその名が付けられている。有翼ライオンは、ナバタイの女神ウッザーのシンボルのひとつ。よってこの神殿はウッザーを祀るためのものだと考えられている(女神アッラートを祀る神殿という説もある)。建造年は紀元27年。アレタス4世の治世だ。この神殿で見つかっている碑文のほとんどに彼の名前が言及されている。現在は建物の土台部分しか残っていないが、規模でいえば大神殿(→P.72)とほとんど変わらない。構造は単純で、長方形の敷地に**ポーチコ(柱廊式玄関)**と**神殿**本体。ポーチコはワディ・ムーサの目前まで迫っていたという。神殿内は漆喰で明るくゴージャスに塗られていたようだ。また、この神殿には、金属、大理石などの**ワークショップ**が付属しており、神殿の活動を支えたものであると考えられている。発掘調査による出土品のなかには、碑文の書かれた女性像、エジプトの小像、ナバタイの神を表したブロックなどがある。重要な神殿であることは間違いないが、損傷がひどく、あまり多くのことはわかっていない。これからのさらなる調査に期待したい。

ナバタイの女神ウッザー
ウッザーはイスラム以前のアラビアにおける、アッラート、マナートを含む主要な3女神のひとり。ナバタイ人の間では主神ドゥシャラーのパートナーとして重要視されている。ちなみにアッラートはその娘として位置づけられている。しばしば周辺国の女神と同一視される。北シリアの女神アタルガティス、エジプトのイシスなど。

アレタス4世
→P.60欄外

修復作業が行われている



モザイクが残るビザンチン時代の教会 AD6

ペトラ(ビザンチン)教会

Petra(Byzantine) Church

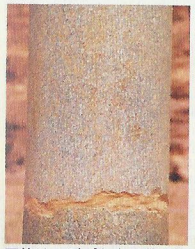
MAP 折込裏B2

バル・サウマBar Saumaの奇跡

ペトラのナバタイ人たちは、5世紀になってもなお、自分たちの神々の信仰を捨てようとせず、偶像崇拝を行っていた。キリスト教徒ですら、伝統的なナバタイの宗教とキリスト教が混ざり合ったような儀式を行っていたという。5世紀初め、バル・サウマという修道士がやってきて、ペトラの住民たちに異教を捨てるように迫ったが、ペトラの神官と人々は町の門を閉ざして彼を中に入れようとしなかった。当時、ペトラは長年の干ばつに苦しんでいたのだが、その時「奇跡」が起きて、雨が降った。これをきっかけに、ペトラ人々は皆キリスト教に改宗したという。

井戸のような貯水槽

青い円柱が印象的な青い教会



円柱はエジプト産の花こう岩でできている

パピルスが保存された理由

パピルス文書は6世紀末あるいは7世紀初頭に教会が火災で崩壊した際に燃えて炭化したので保存されたといわれる。

ペトラ教会に残るモザイク

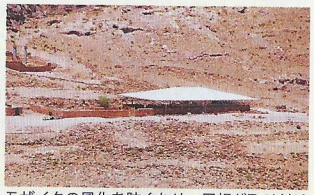
キリスト教時代の教会

この教会はかつて地中に埋もれていたが、1990年にアメリカの考古学者によって発掘され、その美しいグレコ・ローマン様式のモザイクが人々の知るところとなった。もとはナバタイ人の建物だったものを、ペトラのキリスト教化に伴い、ビザンチン時代の530年頃に教会に造り替えられたものだ。建設後すぐに火事に見舞われ、551年には大地震により大きな被害を受けている。入口を入ると井戸型の**貯水槽**があり、左の奥には**洗礼を行うための部屋**がある。右側が教会の本殿で、左右に**列柱**が並び、その外側に保存状態のよい**モザイク**が残されている。これはペトラ周辺で最も美しいもので、さまざまな図柄が見られる。動物、鳥、人間。そしておもしろいのが四季や海、大地、知恵などを擬人化した画。人間がそれぞれのシンボルを手にしている。

ペトラ教会の北には**青い教会**と呼ばれる、比較的小さな教会跡が残っている。名称の由来となった4本の美しく青い円柱は、エジプト産の花こう岩で、教会のそばからもってこられたものだ。後陣には主教の玉座が残っている。

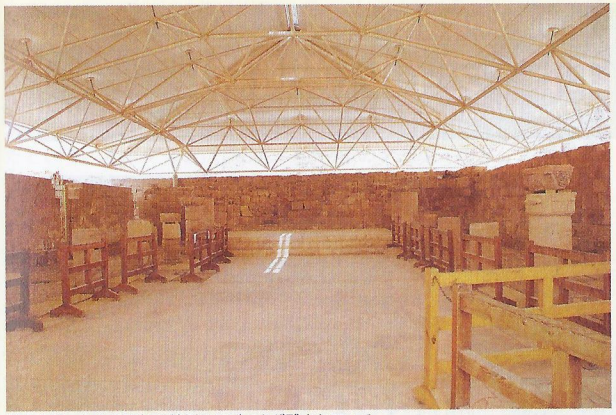
炭化したパピルスを発見

1993年、発掘中のペトラ教会にて、42巻の一連の書物を含む152巻ものパピルスの巻物が発見された。発見場所は教会の北東の隅で、巻き物の書かれた年代は528〜582年。内容は教会の輔祭(東方正教会の職分のひとつ)による極めて私的なもので、ビザンチン時代のペトラの様子がわかる貴重な史料である。



モザイクの風化を防ぐため、屋根が取り付けられている

著者の名前はオボーディアヌスの息子、テオドルス。彼がまだ若い頃、バスース家の娘ステファヌスと結婚する。一家はバスース家とつながりを深めるが、すぐに持参金をめぐっての争いが起きてしまう。何とも個人的な話だが、この争いについての記述だけで数巻あるという。記述はギリシア語でされているが、いなか町の地名などを表すのにはアラビア語が使われており、ビザンチン時代のナバタイ人がアラブの伝統を守り暮らしているのがうかがえる。また、その内容から6世紀のペトラはまだ組織的な町としての機能を残していたことも知ることができる。



教会内部。左右の円柱の外側にモザイクが残されている

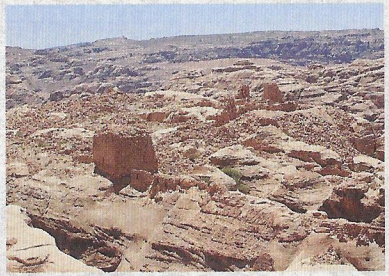
四季を人間で表したモザイクがおもしろい

ペトラと十字軍

第1回十字軍は1099年にエルサレムを陥落し、エルサレム王国を成立させた。王国成立直後はヨルダン川東岸地域にまで十字軍の支配は及んでいなかったが、城塞構築による十字軍領土の防衛と、ダマスカスからヨルダンを経由してカイロ、メッカを結ぶ交易・巡礼路の支配を目指し、12世紀初頭から十字軍は徐々にヨルダン川東岸、現在のヨルダンの領域へ侵攻していく。1115年には、ペトラ近郊にMont Real(王の山)と呼ばれたショーバック城が築かれ、ヨルダン川東岸地域での十字軍の中心拠点となった。1142年には、より北部のカラクの町にカラク城が築かれ、ここがショーバック城に代わり十字軍の中心拠点となる。

ペトラでは、1127年頃から1131年頃にかけて、Li Vaux Moise(モーセの谷)と呼ばれたアル・ウイーラ(Al-Wu'ira)城が、ペトラ遺跡の外側に築かれる。また、ペトラ遺跡内の山岳地帯には、エル・ハビス(El-Habis)の城塞も築かれた。アル・ウイーラではテンプル騎士団が防衛の任にあたったといわれる。

こうした十字軍の城塞は、やがてそのすべてが反撃するイスラム政権側の手に渡っていく。



アル・ウイーラ城の遺跡

1188年には、ペトラのアル・ウイーラ城とカラク城、そして1189年にはショーバック城が、アイユーブ朝のサラディーンの軍により陥落する。

アル・ウイーラ城の遺跡は、モーベンピックホテルの近くに残されており、城壁や塔の一部を見ることができる。エル・ハビスの十字軍城塞の遺跡は、ペトラ遺跡内にある博物館の裏手の山あいに残されている。加えて、犠牲祭壇の近くにも、十字軍によるものと思われる城壁が残っている。(大山晃司)

ペトラ遺跡の最奥地

AD1

エド・ディル(修道院)

Ed Deir (Monastery)

MAP 折込裏A1

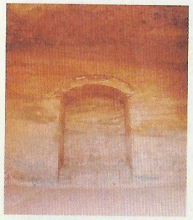
エド・ディルの正式な発音
エド・ディルの正式なアラビア語発音は"エッディール(エッデイル)"。エド・ディルで定着しているが、これでは現地で通じない。もっとも、現地のベドウィンは観光客の前では"モナストリー(修道院)"と呼ぶことが多い。

用語解説

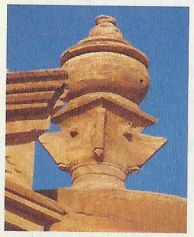
トロス
→P.60欄外

オボダス2世
在位は前62～前59年。ナバタイ王は代々ギリシア名をもつが、オボダス2世のギリシア名はわかっていない。歴代の王の中で唯一神格化された王として知られている。

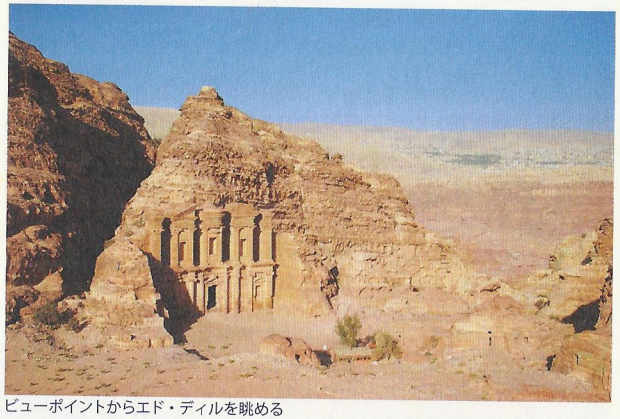
ラベル2世
ナバタイ王国最後の王。在位は70～106年。ギリシア名はソーターで、"救い主、臣下に命と自由を与える"などといった意味。



内部の祭壇跡。両脇に階段が見える



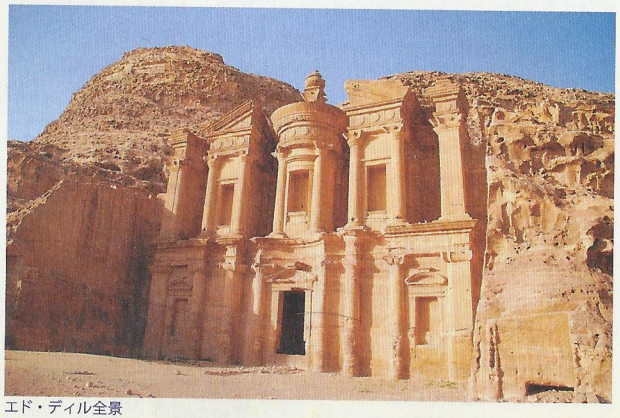
形がよく残っている壺。現在は登頂禁止だ



ビューポイントからエド・ディルを眺める

シンプルなファサード

ペトラ博物館の先から続く800段の階段を上ると、ペトラで最も巨大なモニュメント、エド・ディルが姿を表す。高さ45m、幅50m。ちなみにエル・ハズネは高さ40m、幅28m。大きさでいえばエル・ハズネよりも上だが、装飾に関しては、エル・ハズネに比べかなりシンプルだ。ファサードの様式はヘレニズム様式。トロスには何の神像も置かれず、円柱の頭部も簡素なものだ。内部は、構造的にはカスル・アル・ビント(→P.74)、有翼ライオンの神殿(→P.75)と同じ。一間のだだっ広い部屋があり、正面に階段の付いた祭壇のようなものがある。ここには神を表す石板が立てられたと考えられている。また、壁には十字架が彫られているが、これこそエド・ディルが修道院(モナストリー)といわれているゆえん。十字架が壁に彫られているということから、ビザンチン時代には教会として使われていたという説が広く信じられるようになった。

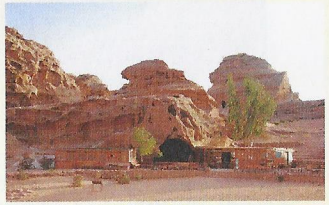


エド・ディル全景

エド・ディルとは何か？

ところでエド・ディルは何のために建てられたのだろうか？　エル・ハズネと同じように墓なのか、はたまた神殿なのか。1990～1991年に行われた発掘調査では、エド・ディル周辺から碑文が見つかり、エド・ディルは"神オボダスのシンポジウムである"、と書かれてあったという。オボダスとは前62～前59年のナバタイの王、オボダス2世のこと。ネゲブ砂漠にあったナバタイ人の町、アブダットの由来となった重要な王である。現在一般的に信じられている説は、ナバタイ最後の王ラベル2世が、神として崇められた先王オボダスを祀るために建設した、というものだ。エド・ディル前の、人工的にフラットに削られた広場はかつて列柱に囲まれ、オボダスを讃えるために多くの人々が集まった。その後ビザンチン時代には、教会として利用され、修道僧が住むようになったようだ。ちなみに、4世紀のキリスト教の修道士エピファニウスの記録によると、エド・ディルでは、処女から生まれたナバタイの主神ドゥシャラーの生誕を祝う儀式が毎年1月6日に行われていたという。

アブダット
紀元前3世紀にネゲブ砂漠に居住し始めたナバタイ人がつくった町。ネゲブ砂漠では、ほかにマムシト、シブタなどもナバタイ人の町跡として知られている。残る遺跡の多くはローマ時代のもの。



エド・ディル前の洞窟カフェ

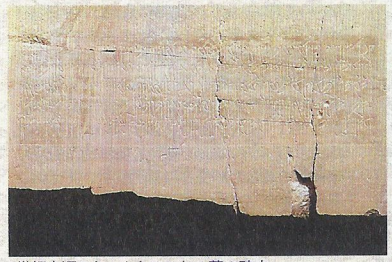
アラビア文字の祖、ナバタイ文字

ペトラを散策すれば、岩壁や遺跡のさまざまな場所にくねくねとした文字が刻まれていることに気付かれることだろう。これらはナバタイ王国で公式に用いられた、ナバタイ文字と呼ばれるものである。ナバタイ人は、フェニキア文字から発展したアラム文字をもとに独自の文字を創り、それを石碑、岩壁、コイン、オストラカ(陶片)、パピルスなどさまざまなものに残している。アラム文字は、紀元前1千年紀半ばからアケメネス朝ペルシャ領内での共通語として使われた「帝国アラム語」とともに、古代中近東で広く使用されていた。ナバタイ人の口語はアラビア語であったとされるが、隊商貿易で国際的に活躍していたため、この帝国アラム語とアラム文字にも古くから親しみ、これらを王国の公用語に採用した。

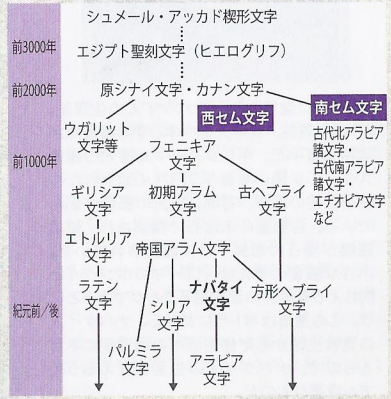
ペトラでこれまでに発見された最も古いナバタイ文字碑文は、前96/95年のものである。初期のナバタイ文字は四角い印象で、まだ独自性が十分に現れていないが、それから2世紀間の間に書体は目覚ましく発達した。

106年のローマによるナバタイ王国併合後、ギリシア語が公用語化されたのに伴い、ギリシア文字が公式な文字として用いられることになったが、人々の間ではナバタイ文字も使われ続けた。また、この文字は、旧王国領内のナバタイ人以外のアラブたちにも大いに広まり、アラビア語を記すのに使われるようになった。それとともに、文字の形も次第に変化して、現在のアラビア文字の原型ができたのである。

この文字は、7世紀にイスラムが興るまで細々と使われ続け、聖典『クルアーン』を編纂する際の公式な文字として採用された。文字はさらに洗練され、書道などの芸術も生まれた。アラビア文字は、イスラム世界の拡大とともに普及し、今ではアラビア語のみならず、ペルシャ語、ウルドゥー語などにも用いられている。それらすべてがナバタイ人につながっていると思うと、実に感慨深いものがある。　(徳永里砂)



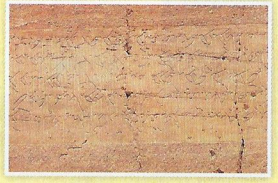
1世紀中頃のトゥルクマニヤの墓の碑文



美しいナバタイ文字の碑文が残る

トゥルクマニヤの墓

Turkmaniyah Tomb MAP 折込裏 B1

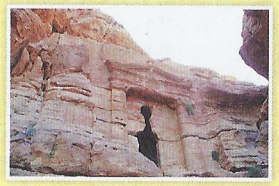


ワディ・トゥルクマニヤ沿いの舗装された道を行くとある。ファサードにはナバタイ文字の長い碑文が残っている。高度なボキャブラリーを駆使しており、言語学的にも興味深いものだ。ペトラ遺跡にはラテン語、ギリシア語などの碑文は多く見られるが、ナバタイ文字の碑文は珍しく、貴重な資料だ。文字のスタイルからマリクス2世(在位40〜70年)の時代のものではないかとされている。碑文には、墓とその付属構築物がドゥシャラーとすべての神々に捧げられたものであり、それに手を加えたり、取り除いたりしてはならないことなどが書かれている。

2匹のライオンの彫刻が残る

ライオンのトリクリニウム(ライオンの墓)

Lion Triclinium (Tomb) MAP 折込裏 B1

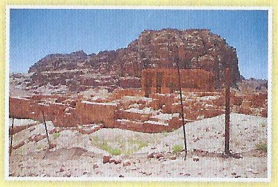


エド・ディル(→P.78)への道の途中でちょっと寄り道。案内板があるのですぐにわかるだろう。谷を少し進むと、入口の両脇にそれぞれライオンが彫られたトリクリニウム(→P.55欄外)がある。1世紀に建てられたもので、風化が進んでいるが、まだ何とかライオンだと判別できる。中はトリクリニウムになっていて、葬祭の儀式が行われたようだ。入口の左側にはドゥシャラー神が彫られた岩が見られ、ペディメント(→P.60欄外)の下には、永遠を示すサークル模様、両脇にメデューサが彫られている。ちなみに入口へ続くちゃんとした道はない。

1世紀の住居跡

アッザントゥール

Az Zantur MAP 折込裏 B3

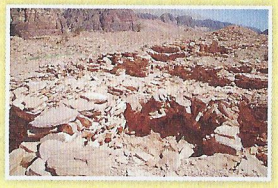


1世紀に建設されたナバタイ人の住居跡。2013年現在、スイスを主体とする調査隊が発掘調査中だ。ギリシア地中海様式の建築スタイルを用いており、円柱に囲まれた中庭を召使の部屋、客間、家主の部屋が囲んでいる。各部屋の床は石で舗装され、壁は漆喰が塗られ色鮮やかに装飾されていた。小さな部屋の壁には、ローマのポンペイと同じような様式の画を見ることができるという。この遺跡はペトラにおける、ナバタイ人の遊牧生活から定住生活への過渡期にあたるもので、ナバタイ人の生活を考えるうえでも重要なものだ。

岩山の上に築かれたエドム人の村

エドム人の村跡

Edomite Village Ruins MAP 折込裏 A3

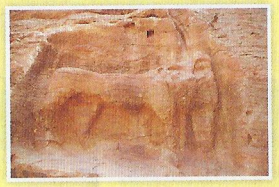


ナバタイ人が来る前にこの地に住んでいたというエドム人は、1178mの岩山ウム・アル・ビヤラ(『貯水槽の母』の意)の平らな頂上に避難所セラをおいた(諸説あり)。エドム人は聖書にもよく登場する、イスラエルの兄弟民族。紀元前7世紀頃までペトラに住んでいたが、ナバタイ人の流入によりこの地を追われた。頂上には8つの釣り鐘型の貯水槽、村の跡、未発掘の墓などが見られる。わずかだが東の端にはナバタイ人の遺跡も残っている。ユダヤの王アマジアが、岩山の頂上から1万人ものエドム人を突き落としたという話が残っており、地元ではおそれられている。

水路の役割を果たしていた

ライオンのモニュメント

Lion Monument MAP 折込裏 C3

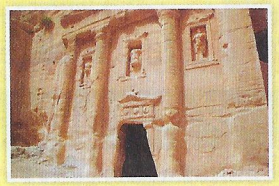


犠牲祭壇を下って最初に現れるのがライオンのモニュメント。現在は顔の部分の風化が進み判別しにくい。実はライオンの顔はもともと金属でできていたため、ここまで風化してしまったのだという。犠牲祭壇の山に降った雨は、全長4.5mのライオンの頭の上をとおって口から排出され、前足へと伝っていく。そして山の下にある庭の墓の横にあるダムへと流れるようになっている。いわば樋である。ライオンの左上には祭壇のようなものが彫られている。水を重要視したナバタイ人は水に関わる場所には必ずこのような祭壇を残している。

兵士の彫像が見られる

ローマ兵士の墓

Roman Soldier Tomb MAP 折込裏 B3

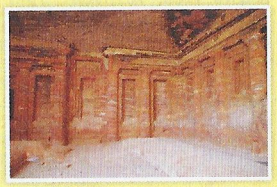


ファサードの真ん中に、ローマの位の高い兵士の彫像が彫られていることからその名が付いている。1世紀にナバタイ人により建設されたものだが、のちにローマ属州時代に改装がなされた。ファサードのローマ兵士はこの頃のものだと考えられている。発掘調査によると、建物は2階建てで、ファサードの向かいには切り出した石で造られた、円柱で囲まれた石畳の中庭があった(今は見る影もない)。建物の中はベドウィンのたき火で真っ黒になっている。ナバタイ人の建築では、このような建築はあまり見られない。

手の込んだ内装をもつトリクリニウム

カラード・トリクリニウム

Colored Triclinium MAP 折込裏 B3

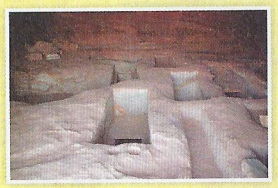


ローマ兵士の墓の正面にあり、かつては互いに同じ建物として、中庭でつながっていたとされている。ローマ兵士の墓に埋葬された故人のために、こちらのトリクリニウムで葬祭の儀式が行われた。ペトラ遺跡で唯一、内部に手の込んだ装飾が施されている建造物として知られ、等間隔に掘られた円柱と、その間に掘られた壁がんを見ることができる。本来は鮮やかな漆喰が塗られていたが、現在ははげ落ちて天然の美しい岩肌が露出している。ガーデン・トリクリニウムとも呼ばれている。

埋葬穴を見ることができる

ルネッサンスの墓

Renaissance Tomb MAP 折込裏 B3



美しいファサードをもつ。3つの骨壺にナバタイ様式のフレーム、天然の砂岩の模様も華やかだ。内部は床一面に14の埋葬穴が掘られ、すでに盗掘に遭っているが、2003年の発掘調査ではナバタイコインやナバタイ土器、人骨などが発見されている。ペトラには何百もの墓が存在するが、これほどたくさんの埋葬穴の見られる墓も珍しい。ひとつの墓では碑文が見つかっており、"ワッハービッラーヒの息子タイムTaymu Son of Wahabillahy"と書かれていた。1世紀後半に建てられたものだと考えられている。